



北海道大学 社会科学実験研究センター

# 2020 年度自己点検評価報告書

2021 年 6 月







北海道大学 社会科学実験研究センター

# 2020 年度自己点検評価報告書

2021 年 6 月



# 目次

|                                             |    |
|---------------------------------------------|----|
| はじめに：実験社会科学を取り巻く世界の潮流と社会科学実験研究センターの役割 ..... | 1  |
| 1. センター概要 .....                             | 2  |
| (1) 沿革 .....                                | 2  |
| 1) 萌芽段階：21世紀COEの成果とその発展的継承 .....            | 2  |
| 2) 社会科学実験研究センター設立 .....                     | 3  |
| 3) 2011年度までの社会科学実験研究センター .....              | 4  |
| 4) 社会科学実験研究センターの更新 .....                    | 5  |
| 5) 社会科学実験研究センターの時限撤廃 .....                  | 5  |
| (2) センターの理念 .....                           | 5  |
| (3) センターの役割 .....                           | 6  |
| (4) 本学における位置づけ .....                        | 6  |
| 1) 中期目標・中期計画における位置づけ .....                  | 6  |
| 2) 創成研究機構の一組織としての位置づけ .....                 | 8  |
| 3) 北大を特徴づける研究分野・研究テーマとしての位置づけ .....         | 8  |
| (5) 予算・人員措置 .....                           | 9  |
| (6) 施設概要 .....                              | 9  |
| 2. 活動実績の概要 .....                            | 10 |
| (1) 施設利用状況 .....                            | 10 |
| (2) 研究業績 .....                              | 10 |
| (3) 競争的資金獲得状況 .....                         | 10 |
| (4) 拠点間連携 .....                             | 10 |
| (5) 若手研究者の支援とその成果 .....                     | 11 |
| (6) 教育活動 .....                              | 11 |
| (7) アウトリーチ活動 .....                          | 11 |
| 3. 2016年度の活動の点検・総括 .....                    | 13 |
| (1) 4つの目標別の点検・評価 .....                      | 13 |
| (2) 総括と今後の展望 .....                          | 16 |

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 資料編.....                         | 18 |
| 資料 1 実験施設の詳細 .....               | 18 |
| 資料 2 教育研究活動の詳細 .....             | 21 |
| 資料 3 若手研究者の支援とその成果の詳細 .....      | 23 |
| 資料 4 競争的資金獲得状況の詳細 .....          | 25 |
| 資料 5 研究業績一覧 .....                | 29 |
| 資料 6 学外研究機関との共同研究による施設利用実績 ..... | 36 |
| 資料 7 アウトリーチ活動 .....              | 36 |
| 付録 1 組織構成員 .....                 | 38 |
| (1) 兼務教員一覧 .....                 | 38 |
| (2) 連携研究員一覧 .....                | 38 |
| (3) 運営委員会委員一覧 .....              | 38 |
| (4) 研究倫理委員会委員一覧 .....            | 39 |
| (5) 点検評価委員会委員一覧 .....            | 39 |
| 付録 2 関連規程及び内規 .....              | 40 |
| 北海道大学社会科学実験研究センター規程.....         | 41 |
| 北海道大学社会科学実験研究センター運営委員会規程.....    | 43 |
| 北海道大学社会科学実験研究センター研究倫理委員会内規.....  | 45 |
| 北海道大学社会科学実験研究センター点検評価内規.....     | 47 |



# はじめに：実験社会科学を取り巻く世界の潮流と 社会科学実験研究センターの役割

---

21世紀に入り、心理学はもとより、経済学、政治学、人類学、社会学、法学を含む広範な社会科学領域において、「社会科学実験」の重要性が世界的に認識されつつあり、「人間・社会科学統合」に向けての理論的整備が、旧来の学問体系を超えて急速に進行してきた。こうした動きは、2002年のノーベル経済学賞が実験経済学・行動経済学に与えられたことを端緒に、2005年、2009年、2012年、2017年にも実験手法を用いている研究者に授与されていることから明らかである。さらに California Institute of Technology、UCLA、University of Michigan、Harvard University などのアメリカの主要大学、University of Zurich、Max Planck Institute、London School of Economics などのヨーロッパの主要大学・研究機関においても、経済学・人類学部門に大規模な実験研究施設を開設する動きが急速に展開してきた。同時に、それぞれの国際拠点間での社会科学実験研究のネットワークが整備されつつあり、研究者・PDの交換を含む人的交流も盛んになりつつある。こうした動きは、単に実験という社会科学において新規な研究手法の普及に留まらず、ゲーム理論を共通の概念軸に、「人間・社会科学統合」に向けての理論的整備が、旧来の学問体系を超えて、急速に進行しているという文脈から生じている。こうした流れから、現在、自然科学とも真に交通可能な人間・社会科学の姿が具体的な像を結び始めているといえよう。

こうした世界的潮流の中、先端的な社会科学実験を展開するための日本で唯一の専門機関である北海道大学社会科学実験研究センターは、2007年4月に、学内共同教育研究施設として発足した。本センターは、時限完了を控えた2011年10月に創成研究機構評価委員会による審査を受け、極めて高い評価のもと、同年12月に、2012年度からの5年間の更新が全学的に決定された。また、これに先立ち、2011年3月には、北海道大学における「北大を特徴づける研究分野及び研究テーマ」の「世界レベルで見て北大に優位性のある研究分野」の一つとして、「実験社会科学」が選定されており、本学における戦略的な位置づけが明確化された。

本報告では、2020年度のセンターの活動を自己点検・評価する。以下では、最初に本センターの沿革および現況について述べた上で、全学における位置づけ（第3期中期目標・中期計画における位置づけ及び創成研究機構の一組織としての位置づけ）、予算・人員措置、施設概要の面から、現在の本センターの姿を概観する。次に、1年間の本センターの教育・研究活動を概観した後（詳細については資料2の「教育研究活動の詳細」を参照）、活動の総体について自己点検・総括する。

自己点検にあたっての評価軸は、北海道大学社会科学実験研究センター規程第2条の規定に拠る。同規程には、「センターは、北海道大学（以下「本学」という。）の学内共同施設として、社会科学実験に関する研究を行うとともに、社会科学実験分野における人材の育成、研究成

果の国内外への発信、及び国内外の研究拠点との連携の強化を促進することにより、社会科学実験に関する教育研究の進展に資することを目的とする。」と記されている。この規定を承けて、本報告書では、以下の4つの側面、すなわち、①社会科学実験における先端研究の推進、②社会科学実験分野における有為の若手人材の育成、③国際的にインパクトのある研究成果の発信、④海外の研究拠点と連携強化を通じた人間・社会科学における実験研究のための国際ネットワーク構築をどの程度達成できたかについて総括する。最後に、こうした自己点検・総括をもとに、社会科学実験研究のセンターの今後の活動指針を展望する。

## 1. センター概要

---

### (1) 沿革

#### 1) 萌芽段階：21世紀COEの成果とその発展的継承

実験社会科学を取り巻く世界的な流れの中で、北海道大学文学研究科・教育学研究科（現：文学研究院・教育学研究院）の教員から構成される21世紀COE研究拠点「心の文化・生態学的基盤」は、5年間（2002年度－2006年度）の活動を通して、アジアにおける社会科学実験の最中核拠点として、第一線の国際的地位を確立した。以下では、社会科学実験研究センター設立の萌芽段階にあたる、21世紀COE研究拠点（以下では21COEと略記）の研究教育活動について述べる。

2002年秋、「心の文化・生態学的基盤」に関する拠点形成計画が、21COEとして採択された。2003年4月には、実験研究のための施設が北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟6階に完成し、本格的な活動が開始された。

CEFOM/21（Center for the Study of Cultural and Ecological Foundations of the Mind, a 21st Century Center of Excellence）は、2002年度に採択された人文科学分野における全国で20のCOE研究拠点の中でも、その尖鋭さの面で際立っていた。同拠点はいわゆる「・・・の総合的理解」といった総花的な研究・教育のあり方を求めるのではなく、変革期にある人間・社会科学の今後50年の方向を定めることになると考えられる最も深く困難な問題——人間の社会を可能としている心のメカニズムの解明——を正面からとりあげ、それらの問題に全力を集中するという研究戦略をとった。20世紀後半を支配した社会科学におけるタブラ・ラサの神話が崩壊しつつあるなか、科学的な研究成果にもとづく新たな人間観の構築こそが、これから生まれる新たな社会科学に最も強く求められている。CEFOM/21は、様々な研究を通して、この新たな科学的人間観構築のために必要とされる科学的な基礎データの提供の実現を目指した。

2002年秋の拠点発足以降、研究論文数は急激に増加した。この傾向は、国際誌のみに限った研究論文数でも同様であった。研究論文数の増加と並行して、研究の国際的インパクト（ISIによる国際研究誌上での被引用数）に関しても2002年以降、年を追うごとに増加した。例えば、



同拠点リーダーであった山岸俊男教授の論文の国際的インパクト（被引用数）は、人文系他 19 拠点のリーダーの合計の 2 倍以上に達し、他を凌駕した。また、CEFOM/21 の発信する論文は、*Journal of Personality and Social Psychology* や *Journal of Experimental Social Psychology* などの社会心理学系の学術誌、*Psychological Review* や *Psychological Bulletin* などの心理学一般の学術誌のみならず、*American Sociological Review* や *American Political Science Review* などの社会科学系の学術誌、さらには *Nature* や *Science* などの自然科学系の学術誌掲載の論文にも引用された。2005 年には、非人文科学系学術誌からの引用が全体引用の約半数を占めるに至った。

同拠点では、事業推進担当者の第一線の研究活動に若手研究者がチームの一員として積極的に関与していくことで、研究能力を育成する教育を行った。加えて、研究成果を国際的に発信していくための能力をもつ若手を育成する教育を展開した。具体的には、国際水準の研究を指導するとともに、研究成果の海外学術誌への投稿・海外学会等での報告・COE 国際シンポジウム・ワークショップ等での発表を奨励し、そのための人的援助（外国人教授およびポスドク研究員の採用、および彼らによる英語による教育）および経済的援助（国際学会での発表にかかる旅費を補助）を実施した。その結果、若手研究者による論文数は、総数、第 1 著者の場合のみ、および国際誌掲載のみのいずれの場合も 2002 年以降急激に増加した。さらに、若手研究者による国際的インパクトも年々増加し、2005 年においては、他の人文系 19 拠点リーダーの総数を越えるほどであった。このことは、同拠点の若手研究者が大きな国際的インパクトを持ちえる研究者として成長したことを示している。

同 21COE は 2007 年 3 月をもって終了したが、日本学術振興会の審査委員会から、「設定された目的は十分に達成され、期待以上の成果があった」という A 評価を得たと共に、21COE 事業全体の事後総括の中で「拠点形成の組織的・戦略的なシステムのモデル的なプログラムの事例」としてとりあげられるに至った。

## 2) 社会科学実験研究センター設立

上述のようにCEFOM/21は大きな成果を収め、北海道大学は2007年までの時点で、アジアにおける社会科学実験の最中核拠点として第一線の国際的評価を得るに至った。同年3月の21COEの終了を控え、同分野における北海道大学の国際的評価を一層確実なものとし、その役割をさらに発展させるために、ソフト・ハード両面のインフラストラクチャーの整備が必要であるとの認識が学内で共有された。その結果、これらのインフラを提供する土台として、社会科学実験研究センターの設立が検討された。

2007年2月、北海道大学社会科学実験研究センター設置準備委員会が正式に発足し、同月、設置が承認され、同年3月、同センターの規程及び運営委員会規程が整備された。同センター規程第2条の規定には、「センターは、北海道大学（以下「本学」という。）の共同教育研究施設として、社会科学実験に関する研究を行うとともに、社会科学実験分野における人材の育成、研究成果の国内外への発信、及び国内外の研究拠点との連携の強化を促進することにより、社会科学実験に関する教育研究の進展に資することを目的とする。」と明記されている。

以上の経過を経て、2007年4月、先端的な社会科学実験を展開するための日本で唯一の専門機関である、北海道大学社会科学実験研究センターが、学内共同教育研究施設として発足した。21COEによる教育研究資産を継承しつつ、1) 社会科学実験に関する研究の推進、2) 社会科学実験分野における人材の育成、3) 研究成果の海外への発信、4) 海外の研究拠点との連携の強化が、本センターの達成すべき目的である。こうした社会科学全般にわたる研究・教育体制を構築するために、構成員は、文学研究科、教育学研究院、経済学研究科、法学研究科、公共政策大学院の文系全部局から兼務教員が配され、山岸俊男教授（文学研究科）がセンター長に就任した。

### 3) 2011 年度までの社会科学実験研究センター

2007年4月の発足以来、社会科学実験研究センターは、上記の4つの目標を達成するために、以下に挙げる複数の機能を担ってきた。

#### ① グローバルCOEプログラム「心の社会性に関する教育研究拠点」（2007年度－2011年度）を展開するための教育研究インフラの提供

社会科学実験研究センターは、グローバルCOEプログラム（以下ではGCOEと略記）「心の社会性に関する教育研究拠点」（2007年度－2011年度）の獲得に大いに資すると共に、GCOEを国際的に展開するためのさまざまな教育研究インフラを提供した。同GCOEとセンター活動とは密接に関わり、そこから多くの教育研究の成果が生まれた（国際的インパクトのある研究の展開、国際的発信能力のある若手の育成）。

#### ② 社会科学実験に関する研究を推進するための大型外部資金獲得のための受け皿

後述するように、社会科学実験研究センターは、GCOEに加え、特定領域研究「実験社会科学－実験が切り開く21世紀の社会科学」（2007年度－2012年度）、最先端基盤研究事業（2010年度－2012年度）など、各種の大型外部資金を獲得するための受け皿としての機能を果たしてきた。

#### ③ 海外主要拠点との連携を通じた国際的な実験ネットワークの構築

社会科学実験研究センターは、経済学、政治学、法学、社会学など広範な社会科学の諸分野との協働を推進すると同時に、進化心理学研究の世界的中心として知られているカリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センターをはじめとする、海外主要研究拠点（スタンフォード大学社会科学研究所、UCLA 行動・進化・文化センター、コーネル大学経済社会研究センター、インディアナ大学認知科学プログラム等）との拠点レベルでの連携強化を進めた。

#### ④ 学内の研究者・大学院生を対象とする施設提供・技術供与・教育展開

本センターは学内共同教育研究施設として、学内の研究者・大学院生を対象に、各種の社会科学実験を行うための施設提供、技術の供与、教育展開を行った。

なお、山岸俊男教授（文学研究科）の定年に伴い、2011年4月より、亀田達也教授（文学研究科）が社会科学実験研究センター長に就任した。

#### 4) 社会科学実験研究センターの更新

本センターは2011年10月に創成研究機構評価委員会による審査を受け、極めて高い評価のもと、同年12月に、2012年度からの5年間の更新が全学的に決定された。以下にその概要を述べる。

2011年7月、創成研究機構より本センターの評価にかかる委員会からの依頼により、8月下旬に書類にて自己評価を提出した。さらに9月、委員長をはじめ本学外の外部委員が過半数を占める評価委員会が招集され、そこでプレゼンテーションを行った。その結果、「本センターは広い領域の社会、人文科学を融合し、人間の社会、経済、文化と心に迫る新しいパラダイムを追求し、設置期限内における4つの達成計画全てにわたり、それぞれ注目すべき成果が得られている。まだ予備的な結果もあり、個人を対象とする実験の成果を集団の行動や特性に結びつけるには、いま一段の飛躍が必要であるが、今後の研究によりすばらしい成果が出ると期待される。」とのコメントの上、最高のS評価が得られ、「創成研究機構評価委員会としては、本センターで実施されている研究の継続を期待する。」と結ばれている。

この評価委員会の評価調書を受け、2011年11月に本センターの将来計画を作成・提出し、翌年1月の教育研究評議会での審議・了承後、同月の役員会において正式に、2012年度からの5年間の更新が措置された。

2012年度及び2013年度には、『卓越した大学院拠点形成支援補助金』（SEFM）を受け（2012年度53,820千円、2013年度19,712千円）、その運用に際し中心的な役割を担った。

なお、亀田達也教授（文学研究科）の転出に伴い、2014年10月より、結城雅樹教授（文学研究科）が第三代社会科学実験研究センター長に就任した。

#### 5) 社会科学実験研究センターの時限撤廃

2015年4月1日、北海道大学の全学的な組織再編により、当センターは、従来の「共同教育研究施設」から新たに「学内共同研究施設」に変更されると共に、設置時限が廃止された。

なお、2018年10月より、大沼進教授（文学研究院）が第四代センター長に就任した。

## (2) センターの理念

社会科学実験研究センターは、以下の事項を理念とする。

- 社会科学における実験研究のための手法の開発と普及を通して、社会科学の実験科学化を推進する。
- 社会科学における実験研究の本格的導入により、人間科学と社会科学の双方に対して共通の対話可能な研究環境を提供する。

- 人間・社会科学における実験研究のための国際実験ネットワークの構築を進め、世界各国の拠点を結ぶ国際実験の促進をめざす。
- 実験研究を通して人間科学と社会科学とを結びつけるための研究活動を行い、その成果を国際的に発信することのできる若手人材を育成する。

### (3) センターの役割

社会科学実験研究センターの主たる役割は、本学の学内共同研究施設として、学内外の研究者を対象に、社会科学実験研究のための施設提供と技術供与を行うことを通じて、以下の研究・教育目標の達成に寄与することである。

- 社会科学実験の国際拠点として、先端的研究を展開し、研究成果を国際発信する。
- 社会科学実験の中心として、他大学の研究者との協力のもと、若手研究者を育成する（博士研究員・リサーチャーの受け入れ、ワークショップの開催等）。
- 社会科学実験の論理と実践に関する大学院共通授業を展開する。

### (4) 本学における位置づけ

#### 1) 中期目標・中期計画における位置づけ

北海道大学の第一期中期目標・中期計画（2004－2009年度）では、人間・社会統合科学が研究重点領域として構想された。同時に、「旧来の学問体系を越えて新たな学問領域の創生を果たすために、複合的学際的領域における世界的研究拠点形成の核となりえる研究の推進」が目標とされた。21COE「心の文化・生態学的基盤」を継承・発展させ、GCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」の基盤を提供する形で、社会科学実験に関心をもつ文系5研究科・部局の研究者を結集した本センターは、こうした第一期中期目標・中期計画の理念と明確に関連していた。

社会科学実験研究センターには、その発足以来、第一期中期目標・中期計画に沿う形で全学的な支援が行われてきた。その支援の中心は、人文・社会科学総合教育研究棟6階に実験研究のための施設が確保されたこと、全学運用教員制度による教員の戦略的配置により同センターの運営に必要とされる人件費等が措置されたこと、の2点である。現在、本センターはこうした全学的支援を背景に、GCOE拠点にインフラを提供し、拠点形成に参加する文学研究科、教育学研究院、経済学研究科等の諸組織での大学院教育の高度化と部局横断的な若手研究者育成プログラムを強力に推進してきた。

さらに、第二期中期目標・中期計画（2010－2015年度）では、「研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置」として、「基礎領域における研究を持続的に推進するとともに、（中略）実証型・フィールド型の研究や先端融合領域の研究を重点的に支援する。」、「研究成果を、国際的に評価の高い学術誌や著書、国際学会・シンポジウム等に積極的に発表す



る。」としており、社会科学実験研究センターは、教育研究活動の概要（p.10～12）で述べるように、着実にこの目的に沿った活動を果たしてきた。また、第二期中期目標・中期計画では、研究実施体制について、「「創成研究機構」において、本学の研究戦略に基づき、附置研究所、共同利用・共同研究施設、学内共同利用研究施設間の連携を進め、共同研究プロジェクトを機動的に推進する。」としており、本センターも、その一つとして明確に位置づけられている。

2010 年からは、文部科学省の最先端研究基盤事業の連携拠点として、京大をはじめとする心理学系研究拠点とともに「心の先端研究のための連携拠点（WISH: Web for the Integrated Studies of the Human Mind）構築」を推進している。他分野・他大学の研究者との間で先端的な共同研究体制を構築するという本センターの方向性は、「他大学等との連携による効果的な共同研究を推進し、全国に（また世界に）開かれた研究拠点としての地位のより一層の向上を図る。」という第一期中期目標・中期計画の、また、「他大学及び諸研究機関と効果的な連携研究を推進する。」という第二期中期目標・中期計画の理念と整合する。

第三期中期目標・中期計画（2016－2021 年度）においても、全学的な研究水準及び研究成果に関する目標－「持続可能な社会を次世代に残すため、グローバルな頭脳循環拠点を構築し、世界トップレベルの研究を推進するとともに、社会課題を解決するためのイノベーションを創出する。」－の達成に貢献していく。本センターもこの目標に呼応し、「人文学・社会科学の中心的拠点として、当該領域の最先端の研究を牽引し、異分野融合研究を推進する。」ことに、人文・社会科学から取り組む。また、本学では研究目標として「異なる視点を持つ研究者の知のネットワークを形成し、新たに国際共同研究を 45 件以上展開するなど、グローバルな頭脳循環のハブとして研究を推進する。」と唱っている。学内共同利用研究施設を有する当センターでは、「学内共同利用施設として、幅広い国際共同研究を支援し、国際共同研究を促進する。」の一環として、社会科学における国際共同研究のハブとしての機能を強化する。加えて、若手人材育成面でも、本学では、「創造的な研究を自立して進めることができる優秀な若手研究者を育成する。」という目標の下、「若手教員の継続的なキャリア形成支援のため、本学がこれまで培ってきたテニュアトラック制度をいかに、人文社会科学系分野の育成プログラムの充実、外国人教員への支援策等を盛り込んだ新たな育成制度を実施する。この制度により、テニュアトラック教員を 15 名以上採用し、育成する。」という目標を掲げている。当センターは、ここにある人文社会科学系分野の育成プログラムの充実に資するべく、「人文社会科学系分野を中心とした育成プログラムの充実を図る。具体的には、若手研究者の積極的な海外派遣や海外研究者との共同研究の推進、若手育成のためのセミナーや顕彰などを行う。」、及び「若手研究者の海外派遣は、短期だけでなく、中長期の派遣もできる限り可能になるような支援策を講じる。」と踏み込んだ表現で若手研究者育成を前面に押し出していく。さらに、第三期には、「大学の教育研究活動の成果を活用し、地域・社会の活性化、課題解決及び新たな価値創造に貢献する。」という社会貢献や地域連携についても、当センターは「地方自治体と連携し、政策提言等を行うのみならず、政策提言に必要となる基礎データの収集等の段階からニーズに対応した意見交換を推進する。」という新機軸を打ち立てている。

## 2) 創成研究機構の一組織としての位置づけ

2009年4月、北海道大学に創成研究機構が設置された。創成研究機構は、「先駆的・融合的学問領域の創成」、「研究成果の社会還元」等を目的に、旧来の創成科学共同研究機構が進めてきた大型の競争的資金によるプロジェクト研究の実施と研究成果の実用化・事業化に向けた活動に加え、学内の附置研究所・研究センターの効率的な運用を目指す組織である。社会科学実験研究センターは、同機構を構成する組織の1つとして位置づけられている（図1参照）。

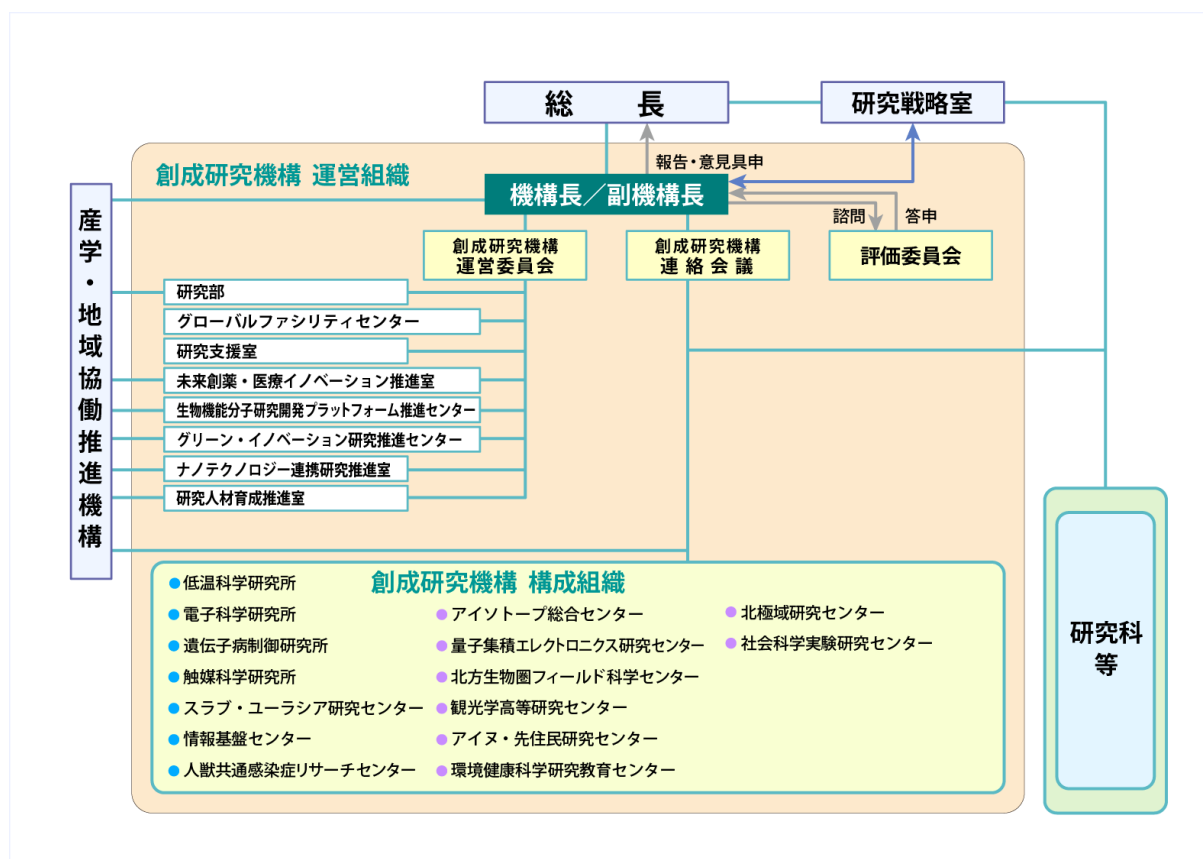


図1 創成研究機構組織図

なお、全学的な組織再編により、2015年4月1日より、センターの時限が廃止され、共同教育研究施設から学内共同研究施設となった。

## 3) 北大を特徴づける研究分野・研究テーマとしての位置づけ

北海道大学研究戦略室は2011年3月に「北大を特徴づける研究分野及び研究テーマ」を全学で41件、抽出した。「実験社会科学」は、「世界レベルで見て北大に優位性のある研究分野」の一つとしてこの中に採択されている。具体的には、「重要な研究分野」として「実験社会科学」が、研究テーマとして「心の社会性に関する研究」（「心は集団環境における適応課題を解く道具群から成るシステムであるという観点から、心の設計を進化ゲームモデルと行動・生理・脳計測実験により明らかにし、社会科学の基盤となる人間像を提供する」）が選定されている。

この「世界レベルで見て北大に優位性のある研究テーマ」には、2012 年度分についても継続して選定された。

## (5) 予算・人員措置

全学運用教員に係る支援経費として、2017 年度までは本部から 134 千円を措置されていたが、全学運用教員制度の凍結に伴い、2018 年度以降は予算及び人員は措置されていない。そのため、当センターは、文学研究院・経済学研究院・法学研究院・教育学研究院・医学研究院に所属する兼務教員により運営されている。

## (6) 施設概要

社会科学実験研究センターは、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 6 階に、1) 集団実験室、2) 国際ネットワーク実験室、および 3) 感覚システム実験室を有している。これらの実験設備は、国内はもとより、国際的にも最高水準の社会科学実験施設であり、高い稼働率を維持している（本センターの有する実験設備の詳細と稼働状況については資料 1「実験施設の詳細」を参照）。

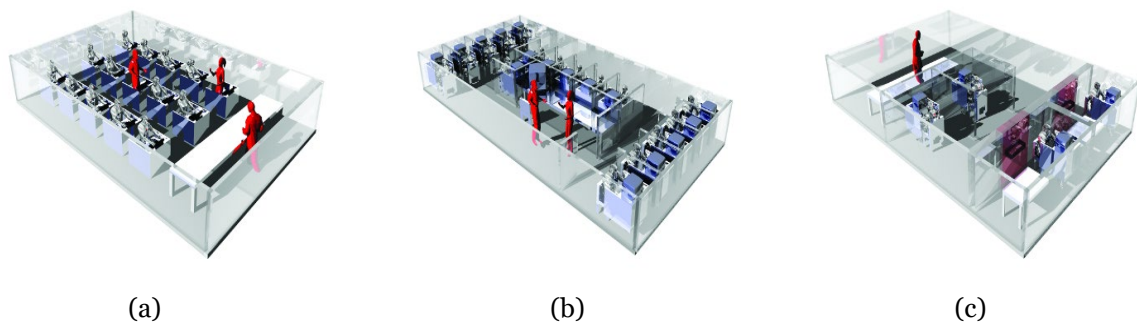


図 2 社会科学実験研究センター実験室の模式図 (a) 集団実験室：プライバシーの程度を調整可能な実験用机を 16 脚設置。(b) 国際ネットワーク実験室：16 室の実験用ブースを設置。(c) 感覚システム実験室：聴力検査室と同等の防音室を 2 室、簡易防音室を 2 室設置。各実験室内、実験室間は相互にネットワークで接続されている

## 2. 活動実績の概要

---

### (1) 施設利用状況

新型コロナウイルスの影響により、実験参加者が実験室を訪れて実施される対面実験は、2020年9月まで実施されず、10月からソーシャルディスタンスを確保し小規模に実施された。また、当センターの保有する北大生の実験参加者プールを用いて、Web実験が実施された。

2020年度に本センターを利用した対面実験は13件実施され、総実験室稼働日数は年間延べ137日、実験参加者総数は延べ471名であった。またWeb実験は8件実施され、参加者数は延べ917名であった。Web実験のうち、本学外の研究者による実験参加者プールの利用は2件、実験参加者総数は502名であった。Web実験を含め参加者のほとんどは本学の学生であるが、この規模での実験研究の組織的推進は国内において類例がなく、国際的にも屈指の規模である（詳細については資料1「実験施設の詳細」を参照）。

### (2) 研究業績

2020年度に合計11件の著書・分担執筆（うち洋書1件、和書10件）、87件の学術論文（うち国際誌73件、国内誌14件）を公刊、60件の学会発表（うち国際学会12件、国内学会48件）を行った（詳細については資料5「研究業績一覧」を参照）。後述するように、これらを含めた当センター構成員による研究業績は、国内外のトップジャーナルにおいて多くの引用を受けている。

### (3) 競争的資金獲得状況

本センターに所属する教員は、2020年度に39件、総額802,367千円の競争的外部資金を獲得した。うち33件（654,366千円）は文部科学省科学研究費補助金（ただし、分担者の金額には研究代表者への交付総額が含まれる）であり、6件（148,001千円）はその他の研究助成金等であった（資料4「競争的資金獲得状況の詳細」を参照）。

### (4) 拠点間連携

本センターはまた、海外の先端研究拠点との連携を引き続き推し進めている。2015年度には、オックスフォード大学認知進化人類学研究所所長、また同大学社会人類学科学科長であり、著名な認知人類学者である Harvey Whitehouse 教授、そして世界で一線級の文化心理学者である アルバータ大学心理学部の増田貴彦教授、2016年度には、香港科技大学社会科学部准教授であり、環境・文化心理学を専門とする Kim-Pong Tam 准教授を本センターの連携研究員に採用した。前センター長の結城は、オックスフォード大学が主導する心理学・人類学・歴史学を融合して人間行動と文化の進化と発展を検討する世界的共同研究プロジェクト Seshat へ参画し、センター長の



大沼進教授は Kim-Pong Tam 准教授との共同研究を推進している。また国内の拠点からは、2013 年に玉川大学脳科学研究所・大学院情報研究科の坂上雅道教授、2014 年に東京大学大学院人文社会系研究科の亀田達也教授、2017 年度に立命館大学総合心理学部の仲真紀子教授を連携研究員に採用した。

## (5) 若手研究者の支援とその成果

2020 年度において、本センターでの活動を基盤とする大学院生・PD は、合計 9 件の競争的外部資金(うち 2020 年度新規 3 件)を獲得し、4 件の学術賞を得ている。また、合計 7 名の大学院生が日本学術振興会特別研究員(うち 2020 年度新規 3 件)に採用されている(詳細については資料 3「若手研究者の支援とその成果の詳細」を参照)。

また本年度は、若手研究者支援の試みとして、社会科学系大手学術出版社 SAGE Publications Asia-Pacific Pte Ltd (以下「SAGE 出版」)からの寄附(107 千円)および「Hokkaido University Campus Initiative (HUCI)構想に基づく各部局等の取組への支援事業」からの予算配分(60 千円)を受け、大学院生を中心とする若手研究者に対する英語論文作成支援を行った。

その結果、若手第一著者による、2 本の英語論文、3 本の日本語論文の英文要旨、2 本の学会発表の英語要旨が執筆された。

## (6) 教育活動

社会科学実験研究センターでは、2019 年度より、大学院共通授業科目「入門ベイズアンモデリング」を毎年開講している。また 2015 年度から、北海道大学「スーパーグローバル大学事業におけるトップランナーとのコラボ事業」との共催で、Hokkaido Summer Institute プログラムで本学に招聘された世界第一線の文化心理学者(アルバータ大学心理学部・増田貴彦教授、ウィスコンシン大学グリーンベイト校心理学部・先崎沙和准教授)による、当センターで研究を行っている大学院生に対する研究及び英語論文執筆指導が行われている(2020 年度は新型コロナウイルスの影響で中止。2021 年度から再開予定)。以上に加え、CERSS コロキウム、共催ワークショップや学術セミナーを随時開催している。こうした取り組みが、本センターにおける深い専門性と幅広い学際的視野の涵養の両立に繋がっている(詳細については資料 2「教育研究活動の詳細」を参照)。

## (7) アウトリーチ活動

本センター兼務教員は、北海道大学内外でのアウトリーチ活動にも積極的に従事している。例えば、2020 年 6 月、本センター兼務教員の河原純一郎教授が、全国消費生活相談協会、札幌市消費者協会、認定心理士オンラインイベントなどで講演を行った。また、センター長の大沼進教授が、国際リスクガバナンスセンターが刊行した「COVID-19: リスクガバナンスの観点」の翻訳の陣

頭指揮を執り、社会的に対処すべき、また見落としがちな点などについての警鐘を発した。本センターの構成員が行った他のアウトリーチ活動については資料 7 を参照のこと。

### 3. 2020 年度の活動の点検・総括

---

以下では、上述の客観的データをもとに（詳細については資料 1～6 を参照）、本センターの 2020 年度の活動について点検・総括し、2021 年度以降の展望をおこなう。

自己点検にあたっての評価軸は、北海道大学社会科学実験研究センター規程第 2 条の規定に基づく 4 つの目標（p. 6 のセンターの理念と役割はこれらの目標に具体化されている）のそれぞれがどの程度達成できたかにある。以下では、目標ごとに点検・評価を行う。

#### （1）4 つの目標別の点検・評価

##### ① 社会科学実験の国際拠点としての先端研究の展開

新型コロナウイルスの影響により、実験参加者が実験室を訪れて実施される対面実験は、2020 年 9 月まで実施されず、10 月からソーシャルディスタンスを確保し小規模に実施された。また、当センターの保有する北大生の実験参加者登録システムを用いて、Web 実験が実施された。

2020 年度に本センターを利用した対面実験は 13 件実施され、総実験室稼働日数は年間延べ 137 日、実験参加者総数は延べ 471 名であった。また Web 実験は 8 件実施され、参加者数は延べ 917 名であった。Web 実験のうち、本学外の研究者との共同研究による実験参加者登録システムの利用は 2 件、実験参加者総数は 502 名であった。Web 実験を含め参加者のほとんどは本学の学生であるが、この規模での実験研究の組織的推進は国内において類例がなく、国際的にも屈指の規模である（詳細については資料 1「実験施設の詳細」を参照）。

##### ② 社会科学実験分野における有為の若手人材の育成

「若手研究者の支援とその成果」（p.11）で述べたように、2020 年度において、本センターに活動基盤を置く若手研究者は 4 件の学術賞を得た。また、日本学術振興会の特別研究員として 7 名（うち 2020 年度新規 3 名）が採用されると共に、2 件の競争的外部資金（特別研究員奨励費 7 件を除く）を獲得している。また 2020 年度には、CERSS コロキウムを 1 回、加えて上述の SAGE 出版の支援および HUCI 構想からの予算配分により英語論文作成支援を実施した。さらに、北海道大学「Hokkaido Summer Institute 2020」で招聘した、アルバータ大学心理学部の増田貴彦准教授およびウィスコンシン大学グリーンベイ校心理学部の先崎沙和准教授による集中講義「文化心理学の最前線 5 2020」、および大学院生向けの英語論文執筆ワークショップが予定されていた（新型コロナウイルス感染拡大により中止）。

これまで当センターで教育指導を受けた若手研究者は、実験社会科学を担う有為の人材として国内外で高く評価されている。たとえば例えば就職面では、東京学芸大学准教授、高知工科大学准教授、明治学院大学准教授、岩手医科大学助教、玉川大学准教授、宮城学院女子大学准教授、広島大学特任助教、広島修道大学教授、静岡大学特任准教授、大正大学准教授、北星学園大学専

任講師、安田女子大学講師、帝京大学講師、大東文化大学講師、名古屋大学准教授、高知大学特任准教授、作新学院大学准教授、長崎大学経済学部助など国内主要大学主要研究拠点で常勤職を得てきた。また海外では、Southampton 大学（英国）助教授、William & Mary 大学（米）准教授、嶺南大学（香港）准教授、北京中央民族大学（中国）研究助手、Konstanz 大学、St Andrews 大学（英）、Oxford 大学（英）、Melbourne 大学（豪）のポスドク研究員などとして、世界に活躍の場を広げてきた。2020 年度には、新たに Rajshahi 大学（バングラデシュ）准教授、北海道教育大学釧路校専任講師の職を得た。

以上により、「社会科学実験分野における有為の若手人材の育成」という所期の目標が着実に達成されている。

### ③ 国際的にインパクトのある研究成果の発信

2020 年度において、合計 73 本の国際学術論文、12 件の国際学会発表を生み出してきた。これらの学術論文は、European Journal of Personality などの心理学・社会心理学分野、Cerebral Cortex などの脳科学分野、そして Scientific Reports などの総合科学分野の一流国際学術誌に刊行されている。こうした成果は、本センターが、アジアのみならず、実験社会科学分野における世界的な主要研究拠点として広く認知されていることを示している。以上から、「社会科学実験の国際拠点としての先端研究の展開」という初期の目標の達成に向け、着実な進展が見られる。

このように、本センターからは、第一線の国際学術誌に数多くの論文が公刊されてきた。また、本センターの発信する論文は、心理学、社会心理学のみならず、経済学、経営学、社会学、政治学、法学、人類学、情報科学、進化生物学、動物行動学、社会物理学などの広範な領域の国際学術誌において、数多くの引用を受けている。図 3 は、本センターの発信した論文が国際学術誌において引用された回数の推移を示している。また、次頁の図 4 は、若手研究者が第一著者として公刊した国際学術誌論文数の推移を示している。いずれの図からも、本センターとその支援する GCOE が発足した 2007 年以降、国際的な研究成果が増大したことが分かる（本センターには、2013 年度より新たに医歯薬系部局からの兼務教員が加わったため、国際学術論文の被引用数が急増している。しかし、人文学系と医歯薬系では根本的に被引用論文数に大きな相違があることから、公正に業績を評価するために 2012 年度までの構成員のみによる研究成果を掲載する。若手研究者が第一著者として公刊した国際学術誌論文数についても、医歯薬系を除いた成果を掲載する）。以上より、「国際的にインパクトのある研究成果の発信」という所期の目標の達成に向け、着実な進展が見られる。

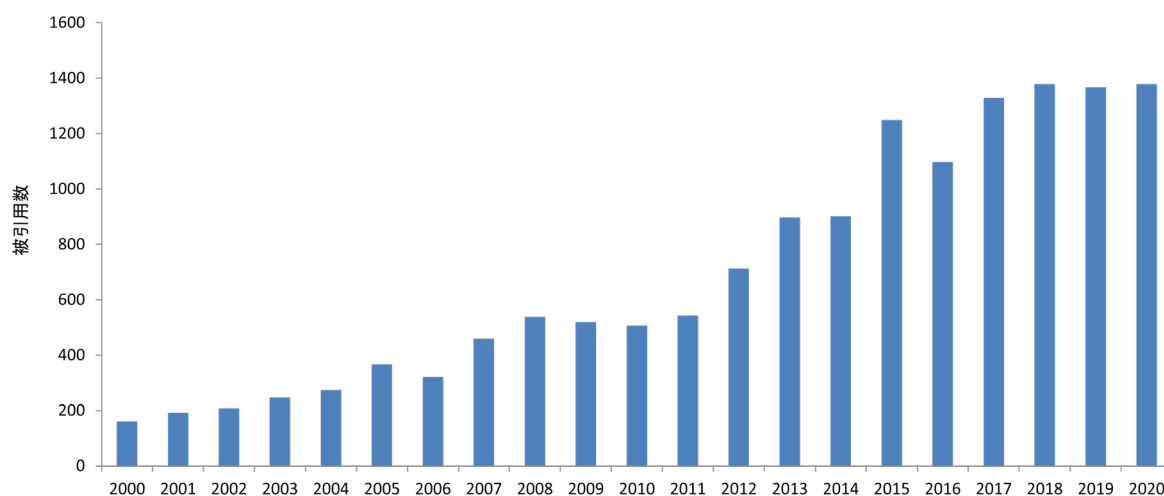


図3 国際学術誌における論文被引用数の推移.

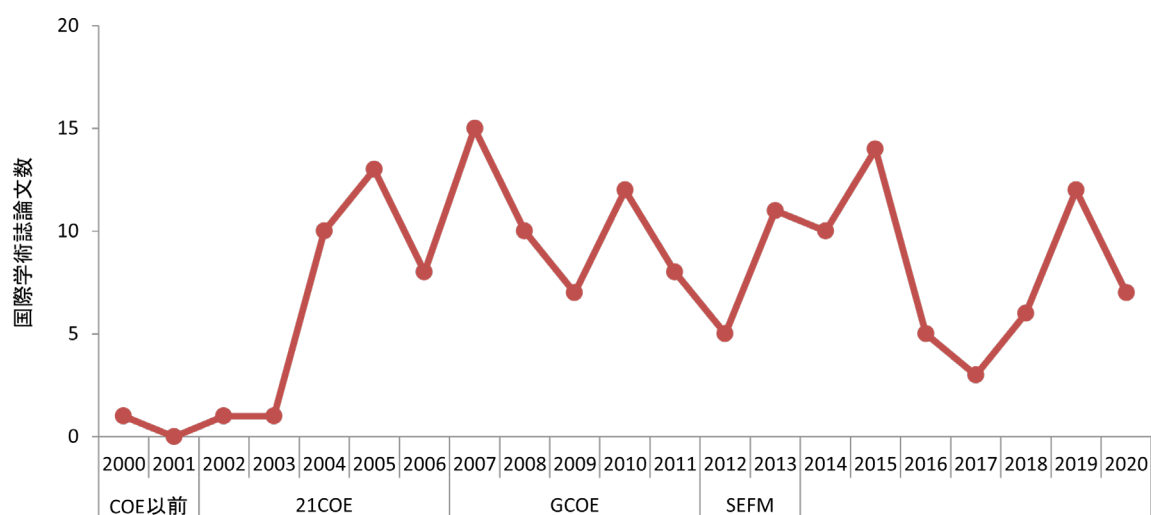


図4 若手研究者が第一著者として公刊した国際学術誌論文数の推移.

#### ④ 国内外の研究拠点との連携強化を通じた、人間・社会科学における実験研究のための国際ネットワークの構築

本センターは、大型研究資金（新学術領域研究、科研費基盤Sなど）の獲得などを通じて、国内外の主要研究拠点（東京大学人文社会系研究科・総合文化研究科、京都大学霊長類研究所、玉川大学脳科学研究所、北陸先端総合科学大学院大学、名古屋大学情報学研究科、オックスフォード大学認知進化人類学研究所、マックスプランク進化人類学研究所など）との間に共同研究体制を構築している。

2020年1月30日付で日本学術会議が公開した「第24期学術の大型研究計画に関するマスタープラン」（マスタープラン2020）では、学術大型研究計画（区分Ⅰ）の一つに「調和ある多様性に向けての新しい心理学の構築」が採択され、北海道大学もその実施機関に含まれている。同計画は、マスタープラン2010、および文科省「最先端研究基盤事業」の補助対象事業としても採択された「心の先端研究のための連携拠点（WISH）構築」事業で積み重ねられた実績を、さらに次のフェーズへと飛躍させるものであると位置づけられている。WISH事業では、本センターに対してシーメンス社製3テスラ MAGNETOM Prisma（施設整備費補助事業;3億円）が導入され、2014年4月より稼働を開始している。医歯学総合研究棟に設置されており、本センターに所属するメンバーだけでなく、医学系から理学系、教育学系に至る学内の研究者によって利用されている。本機器を中核として、学内外で拠点間あるいは学部間の壁を超えた研究連携が推進されている。

## （2）総括と今後の展望

以上、本センターは、教育および研究活動を通じて、社会科学実験の国際的中核拠点としての高い評価を確立してきた。こうした実績は、「社会科学実験に関する教育研究の進展に資することを目的とする」という本センターの設立目的（北海道大学社会科学実験研究センター規程第2条）に適うものであると総括できる。

以上を踏まえた本センターの今後の展望として、本センターに所属する研究者、および国内外の社会科学者の実験研究を支援することを通じて、社会科学実験の国際的中核拠点としてプラットフォーム機能のなお一層の強化を目指す。またこれに関連して、本センターの研究者と、国内外の先端研究拠点の研究者とのネットワーキングと共同研究の発展をさらに支援していく。さらに、本センターはこれまでも若手研究者の登竜門として有為の人材を輩出してきたが、その環境整備をいっそう堅牢にする。

この活動を具現化するものとして、マスタープラン2020「心の先端研究拠点」の実施機関の一つとして本学が含まれることに鑑み、当センターとしても他機関とのネットワークを強化しつつ、調和ある多様性に向けての研究を展開する。同マスタープラン2020心の先端研究は、「人類がAI、ロボットとの共生社会に何を期待しているのか、誰のための技術開発、未来設計なのか、人類がどのような環境を未来に繋いでいくべきかを考えるうえでの「かじ取り役」の役割を果たす。」と謳っている。本センターもこうした問題に貢献すべく、実験社会科学のパラダイムをより深化させることを通じて、文理融合また分野横断的な研究を着実に進めていく。

その上で、現代社会が直面する様々な社会問題の解決に資する活動を行う。上記のマスタープラン2020は、その社会的価値を説明する中で、「自治体関係者を含む政策担当者や実務家らと協働し、具体的な政策立案を行うことで、次世代の利益を考慮した意思決定や次世代視点にたった未来社会のデザインを提案できる。」と述べている。本センターにおける研究は対立する価値や利害をどうやって乗り越えるかという現代社会が直面している問いへの答えを模索してきてお

り、その成果は従来からも行政に対する政策提言や助言等において活用されてきた。今後も引き続き時代の要請に応えるための社会的決定システムの構築に資する実証研究と活動を展開していく。

このように、本センターは社会科学実験の国際的中核拠点として、日々の研究教育活動を鋭意展開している。北海道大学の人文社会科学分野における屈指の先端研究拠点として、社会科学実験の国際的進展と普及に努めつつ、来るべき「人間・社会科学統合」に向けて世界的役割を果たしていくことが、本センターの今後の重要なミッションである。



## 資料編

### 資料 1 実験施設の詳細

#### (1) 施設紹介

##### 集団実験室

16 のパーティションつきデスクが設置され、他者の存在を意識しつつ行う集団内行動の実験に用いる。各デスクのパーティションの高さを変えることでプライバシーの程度を調整できる。また正面には大型スクリーンが設置されており、参加者全員に対し同時に実験の説明を行う必要のある実験が実施できる。また各デスクにはパソコンが設置されており、国際ネットワーク実験室ともネットワークで連結すると、合わせて 32 人まで同時に実験参加が可能である。



図 5 集団実験室における実験実施の様子

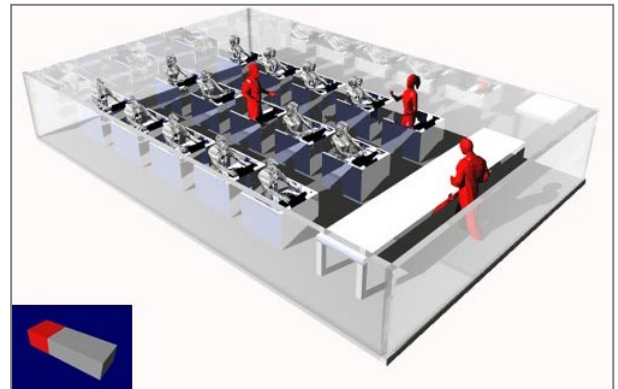
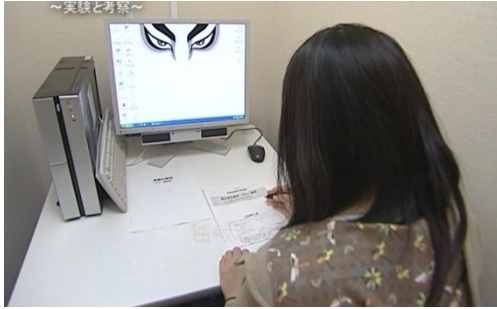


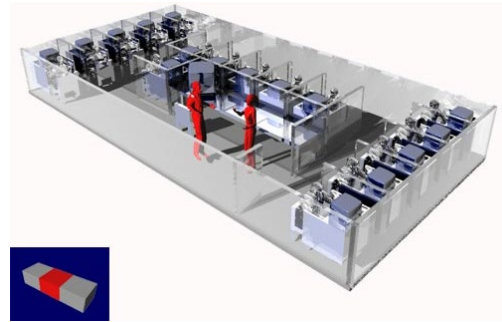
図 6 集団実験室模式図

##### 国際ネットワーク実験室

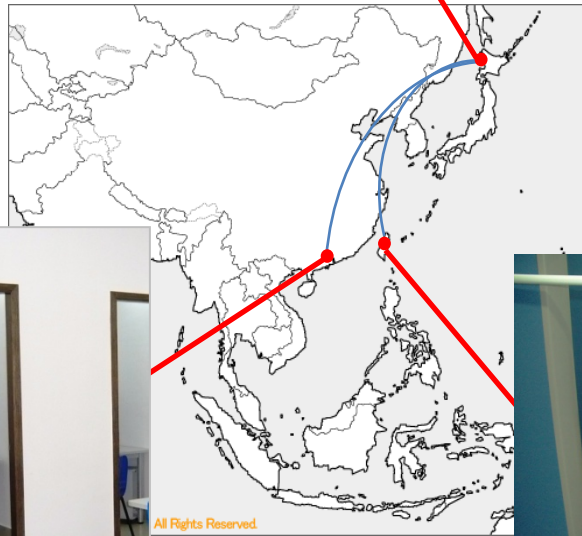
実験参加者用の個室が 16 室用意され、参加者同士あるいは海外の実験室にいる参加者と、コンピュータネットワークを介して相互作用を行う実験に用いる（これまでの実施実績：日本・中国・台湾を連結した国際実験）。参加者用個室に加え、実験準備室が設置されている。これらの個室及び制御室にはコンピュータが配置されており、LAN で接続されている。よってコンピュータを介したコミュニケーションや相互作用の実験が実施できる。個室は完全な防音を施していないため、他の参加者の存在を意識しつつ、かつ相手の顔や名前についての匿名性が保障された状態で実験を実施できる。



国際ネットワーク実験室における実験実施の様子



国際ネットワーク実験室模式図



中山大学(中国)の実験室



NTU(国立台湾大学)における実験の様子

図 7 国際ネットワーク実験室における日本・中国・台湾の国際接合実験

## 感覚システム実験室

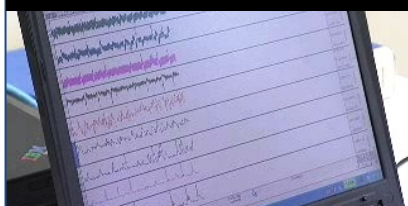
他の参加者と相互作用を行いながら、眼球運動、心拍数、皮膚反応などの感覚・生理データを計測し、行動と情動反応や注意の配分などとの関連を調べるための実験室が整備されている。2つの完全防音室と2つの簡易防音室、および実験のための準備室から構成されており、各実験室内にLANが設置されている。防音室には、眼球運動測定装置、参加者に実験刺激を提示しつつ実験の様子を録画できるプロンプター、心拍などの整理指標を測定する装置、実験実施と分析用コンピューターが配置され、外部の雑音に影響されやすい生理指標・認知指標を測定する実験から分析まで実施できる。

呈示された実験刺激

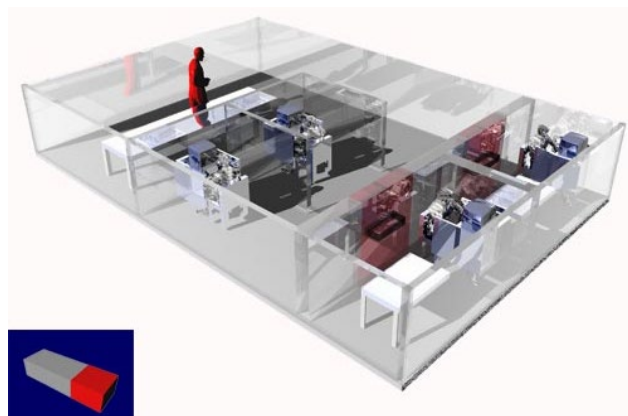
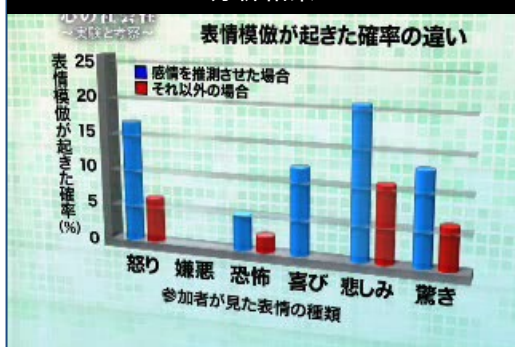


筋電位測定

測定値の分析



分析結果



感覚システム実験室模式図

図 8 感覚システム実験室における研究例

(顔面筋電位検査による二者間の表情、及び感情の転移現象の検証.

Murata, A., Saito, H., Schug, J., Ogawa, K., & Kameda, T., 2016)

## (2) 施設利用状況

新型コロナウイルスの影響により、実験室での対面実験は 2020 年 9 月まで実施されず 10 月から実施された。また、当センターの保有する北大生の実験参加者登録システムを用いて Web 実験が実施された。

2020 年度に本センターを利用した対面実験は 13 件実施され、総実験室稼働日数は年間延べ 137 日、実験参加者総数は延べ 471 名であった。また Web 実験は 8 件実施され、参加者数は延べ 917 名であった。Web 実験のうち、本学外の研究者との共同研究による実験参加者登録システムの利用は 2 件、実験参加者総数は 502 名であった。

さらに、2014 年度より利用を開始した磁気共鳴画像装置 (MRI) の 2020 年度稼働日数は 118 日、実験参加者総数は 166 名であった。これらの参加者のほとんどは本学の学生であるが、この規模での実験研究の組織的推進は国内において類例がなく、国際的にも屈指の規模である。

## 資料 2 教育研究活動の詳細

### 教育活動

社会科学実験研究センターでは、以下の2科目を開講している。一つは大学院共通授業科目「入門ベジアンモデリング」であり、2019年度より開講している。もう一つは2015年度から開始した協働サマープログラムである。これは、北海道大学「スーパーグローバル大学事業におけるトップランナーとのコラボ事業」との共催で、Hokkaido Summer Institute プログラムで本学に招聘された世界第一線の文化心理学者（アルバータ大学心理学部・増田貴彦教授、ウィスコンシン大学グリーンベイ校心理学部・先崎沙和准教授）による、当センターで研究を行っている大学院生に対する研究及び英語論文執筆指導である。これは当センター独自の取り組みであり、同事業との相乗効果をはかるものである。しかし、2020年度は残念ながら、新型コロナウイルスの影響により中止せざるを得なかった。2021年度には再開する予定である。

また、本センターはこれまで、共催ワークショップや学術セミナーを開催してきた。しかしながら、2020年度は新型コロナウイルスの影響により、ほとんどの予定を中止せざるを得なかったが、2021年2月に当センターとCREST「ハイパーデモクラシー：ソーシャルマルチエージェントに基づく大規模合意形成プラットフォームの実現」共催ワークショップが開催された。このワークショップは、民主主義を実験するという大きな構想のプロジェクトの一環として開催されたものであり、実験社会科学のもう一つの新たな方向を示唆するものである。参加者は45名であり、社会心理学、社会学者、政治学者に加え、人工知能研究者も議論に加わるなど、学際研究としての関心の高さも示された。



図 9 CERSS×CREST「ハイパーデモクラシー共済ワークショップの様子(左：中澤高師准教授、右：辰巳智行研究員(ともに静岡大学情報学部))

## CERSS コロキウム、共催ワークショップおよび学術セミナー

| 日付        | タイトル             | 講演者                    | 参加者  |
|-----------|------------------|------------------------|------|
| 2021/2/12 | 施設立地紛争と分配的正義の政治学 | 中澤高師<br>(静岡大学情報学部・准教授) | 45 名 |



### 資料3 若手研究者の支援とその成果の詳細

若手育成の成果を以下の表に示す（交付総額については複数年度にわたる場合、2020年度の直接経費のみを示す）。

#### 日本学術振興会特別研究員

| 氏名    | 資格  | 受給期間<br>(年度)  | 交付総額<br>(千円) | 研究課題名                                     |
|-------|-----|---------------|--------------|-------------------------------------------|
| 前澤知輝  | DC1 | 2020～<br>2022 | 1,200        | 行為・知覚ベースの聴空間表象形成に関わる要因の特定と反響定位能力の推定       |
| 中田星矢  | DC1 | 2020～<br>2022 | 1,100        | 教育による社会の発展をモデル化する-文化進化研究による理論・実証アプローチ     |
| 笹森瞳   | DC1 | 2019～<br>2021 | 1,200        | ルアルドレナリソ神経からのドーパミン遊離機構とD5受容体による衝動性制御機構の解明 |
| 澤頭亮   | DC1 | 2019～<br>2021 | 1,000        | 大脳基底核と小脳の時間情報処理に関する研究                     |
| 舘石和香葉 | DC1 | 2020～<br>2022 | 1,100        | 集団を越えた相互協力関係及び相互信頼関係の構築に関する実証・理論的検討       |
| 山内健司  | DC1 | 2019～<br>2021 | 1,000        | 視覚的印付けにおける抑制テンプレートの可塑性と現実場面への拡張           |
| 横山実紀  | DC1 | 2019～<br>2021 | 400          | 忌避施設立地問題における段階的意思決定の事前合意：潜在的当事者と公正の実証研究   |

#### 2020年度に大学院生および研究員が獲得した学会賞・学術賞・フェローシップ・研究助成（学振特別研究員奨励費を除く）

| 氏名                      | 獲得年度          | 学会費・フェローシップ                                                                                                                  |
|-------------------------|---------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 山本祥子                    | 2020          | 2020年度日本社会心理学会論文賞「トロロコ問題への反応の文化差はどこから来るのか？関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究」                                                           |
| 山内健司                    | 2020          | 2019年度日本基礎心理学会優秀論文賞<br>“Predicting sustained performance over a short time”                                                  |
| 伊藤資浩,<br>反田智之,<br>河原純一郎 | 2020          | 公益社団法人日本心理学会学術大会優秀発表賞<br>「顔面のほくろの分布と魅力的なほくろの位置」                                                                              |
| 笹森瞳                     | 2020          | 第43回日本神経科学大会トラベルアワード “enhances control of impulsivity by activating D1-like receptors in the ventromedialprefrontal cortex.” |
| 舘石和香葉                   | 2019～<br>2020 | 科学技術融合振興財団補助金助成「「集団の評判」の利用と学習は適応的なのか？-進化ゲームシミュレーションを用いた理論的検討-」                                                               |

|      |               |                                                                              |
|------|---------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 横山実紀 | 2019～<br>2020 | 科学技術融合振興財団補助金助成<br>「社会的意思決定プロセスにおける無知のヴェールの有効性と限界：忌避<br>施設立地問題を題材としたゲーミング研究」 |
|------|---------------|------------------------------------------------------------------------------|



## 資料 4 競争的資金獲得状況の詳細

### 文部科学省科学研究費補助金（代表）

社会科学実験研究センター構成員が代表を務める研究について、2020 年度に交付された直接経費の総額を示す。

| 資金名        | 受給期間<br>(年度)  | 研究課題                                    | 氏名            | 金額<br>(千円) |
|------------|---------------|-----------------------------------------|---------------|------------|
| 新学術領域研究    | 2020～<br>2021 | 衛生マスクが生み出すポジティブ・ネガティブな顔遮蔽効果             | 河原純一郎         | 1,600      |
| 新学術領域研究    | 2020～<br>2021 | 偏狭な利他主義仮説の実証的検討                         | 高橋伸幸          | 1,700      |
| 国際共同研究加速基金 | 2018～<br>2020 | 文化的集団淘汰と規範の進化：マクロ・データと大規模集団実験による実証的検討   | 竹澤正哲          | 11,000     |
| 基盤研究(B)    | 2020～<br>2023 | 過敏性腸症候群を不安モデル症例とした新しい注意バイアス修正法の開発       | 河原純一郎         | 2,700      |
| 基盤研究(B)    | 2019～<br>2022 | 相互監視と分散的制裁—情報ネットワーク社会の法意識の解明による国家法の再定位— | 尾崎一郎<br>他 7 名 | 4,100      |
| 基盤研究(B)    | 2018～<br>2021 | 利他性とサンクション、偏狭さ、外集団攻撃の間の連動についての理論的・実証的研究 | 高橋伸幸          | 3,500      |
| 基盤研究(B)    | 2017～<br>2020 | 帰納的学習を介した規範の進化と維持：新たな実験パラダイムの構築を目指して    | 竹澤正哲<br>他 1 名 | 2,800      |
| 基盤研究(B)    | 2019～<br>2022 | 称賛行動の比較社会生態心理学—褒め合う社会と褒めない社会を分けるものは何か   | 結城雅樹          | 3,400      |
| 基盤研究(C)    | 2018～<br>2020 | 組織メンバーの自己成長主導性メカニズムに関する実証研究             | 松尾睦           | 928        |
| 基盤研究(C)    | 2019～<br>2023 | 無知のヴェールを用いた社会的決定過程：功利主義 vs 正義・公正を越えて    | 大沼進           | 1,100      |
| 基盤研究(C)    | 2020～<br>2022 | 日本で開発された自閉症マウスの超音波コミュニケーション障害の解明        | 和田博美          | 1,600      |
| 若手研究       | 2018～<br>2020 | ウマにおける同種他個体・ヒトとの社会的絆形成を促す心理・生理要因に関する研究  | 瀧本彩加          | 1,000      |

### 文部科学省科学研究費補助金（分担）

社会科学実験研究センター構成員が分担者を務める研究について、2020 年度に研究代表者へ交付された直接経費の総額を示す。氏名欄の括弧内は代表者、および兼務教員を除く分担者数。

| 資金名            | 受給期間<br>(年度)  | 研究課題                                         | 氏名                      | 金額<br>(千円) |
|----------------|---------------|----------------------------------------------|-------------------------|------------|
| 特別推進研究         | 2020～<br>2034 | 細胞外足場タンパク質によるシナプス・非シナプス機能制御機構の解明             | 渡辺雅彦<br>(柚崎通介)          | 173,308    |
| 新学術領域研究        | 2017～<br>2020 | 言語の起源・進化の構成的理解                               | 竹澤正哲<br>(橋本敬<br>他 6 名)  | 39,300     |
| 新学術領域研究        | 2016～<br>2021 | 先端バイオイメージング支援プラットフォーム                        | 渡辺雅彦<br>(狩野方伸)          | 313,500    |
| 国際共同研究<br>加速基金 | 2018～<br>2020 | IBS 症状のセルフケアのための eHealth システム構築及びその効果についての研究 | 河原純一郎<br>(田山淳)          | 1,430      |
| 挑戦的研究<br>(開拓)  | 2019～<br>2021 | 主体的多感覚統合による知覚・認知過程の新しい枠組みの構築                 | 小川健二<br>(乾敏郎)           | 8,710      |
| 挑戦的研究<br>(萌芽)  | 2019～<br>2020 | ノイズ誘起脳波ダイナミクスの解析による発達障害特性の解明                 | 河西哲子<br>(北城圭一<br>他 2 名) | 2,210      |
| 基盤研究(S)        | 2016～<br>2021 | 集合行動の認知・神経・生態学的基盤の解明                         | 竹澤正哲<br>(亀田達也<br>他 5 名) | 25,400     |
| 基盤研究(A)        | 2019～<br>2022 | 身体イメージを基礎とする社会的認知過程の自由エネルギー原理による統一的理解        | 小川健二<br>(乾敏郎)           | 13,390     |
| 基盤研究(A)        | 2017～<br>2020 | 身体的表象から自他分離表象への発達プロセスの解明                     | 小川健二<br>(明和政子)          | 8,060      |
| 基盤研究(B)        | 2019～<br>2022 | 乳児の視覚的注意の発達から意識の形成過程を実験的に検討する                | 河原純一郎<br>(山口真美)         | 2,700      |
| 基盤研究(B)        | 2020～<br>2023 | 知覚と注意のゆらぎのメカニズムを脳活動と自律神経系から統合的に理解する          | 河原純一郎<br>(近藤洋史)         | 4,300      |
| 基盤研究(B)        | 2018～<br>2021 | 環境再生デザインの公共社会学：修復的環境正義の実践的理論構築に関する研究         | 宮内泰介<br>(福永真弓<br>他 6 名) | 3,300      |
| 基盤研究(B)        | 2017～<br>2020 | エネルギー技術の多元性と多義性を踏まえたガバナンス方法の研究               | 宮内泰介<br>(丸山康司<br>他 9 名) | 5,200      |

|         |               |                                        |                         |       |
|---------|---------------|----------------------------------------|-------------------------|-------|
| 基盤研究(B) | 2018～<br>2020 | 再生可能エネルギー事業開発にかかわるアクティビズムと合意形成に関する比較研究 | 宮内泰介<br>(西城戸誠<br>他 5 名) | 3,300 |
| 基盤研究(B) | 2017～<br>2021 | 語り継ぐ存在の身体性と関係性の社会学—排除と構築のオラリティ         | 宮内泰介<br>(関礼子<br>他 8 名)  | 2,700 |
| 基盤研究(B) | 2018～<br>2020 | 予測誤差と運動主体感をつなぐ神経機構の解明                  | 小川健二<br>(今水寛)           | 7,020 |
| 基盤研究(C) | 2017～<br>2020 | 社会的立場と性ホルモンの交互作用による注意制御の適応的メカニズムの解明    | 河原純一郎<br>(犬飼朋恵)         | 1,100 |
| 基盤研究(C) | 2018～<br>2020 | スマートフォンで潜在的なメンタルヘルスを評価するアプリケーションの開発    | 河原純一郎<br>(佐藤広英)         | 800   |
| 基盤研究(C) | 2018～<br>2020 | 多感覚の表象に基づく言語の理解と表出に関わる脳機能モデルの構築        | 小川健二<br>(柴田寛)           | 910   |
| 基盤研究(C) | 2019～<br>2021 | 図的表現を用いた思考トレーニングによる空間的知能への影響およびその客観的評価 | 小川健二<br>(杉尾武志)          | 1,300 |
| 基盤研究(C) | 2019～<br>2022 | サル、ウマ、展示動物を対象とした「出会い」と「別れ」に関する行動研究     | 瀧本彩加<br>(中道正之<br>他 1 名) | 1,000 |

## 文部科学省科学研究費を除く研究助成

社会科学実験研究センター構成員が代表および分担者を務める研究について、2020 に研究代表者へ交付された直接経費の総額を示す。

| 資金名              | 受給期間<br>(年度)  | 研究課題                                       | 氏名                | 金額<br>(千円) |
|------------------|---------------|--------------------------------------------|-------------------|------------|
| 科学技術融合振興財団調査研究助成 | 2020～<br>2022 | 対立する価値を超えた合意案の創発を見出すゲーミング開発                | 大沼進               | 884        |
| 科学技術融合振興財団調査研究助成 | 2018～<br>2020 | 決め方の事前合意がのちの合意形成に及ぼす効果：無知のヴェールが機能するとき、泣くとき | 大沼進               | 474        |
| AMED             | 2020～<br>2021 | 精神疾患レジストリの構築・統合により新たな診断・治療法を開発するための研究      | 久住一郎<br>(代表：中込和幸) | 134,000    |

|                                                       |               |                                                  |                         |       |
|-------------------------------------------------------|---------------|--------------------------------------------------|-------------------------|-------|
| 地層処分事業に係る社会的側面に関する研究支援事業                              | 2020～<br>2021 | 地層処分施設のための段階的・協調的アプローチの実践にむけた実証的研究：国民的議論の公正な進め方  | 大沼進<br>(代表：野波寛、<br>他2名) | 4,543 |
| JST 戦略的創造研究推進事業 CREST 信頼される AI システムを支える基盤技術           | 2020～<br>2026 | ハイパーデモクラシー：ソーシャルマルチエージェントに基づく大規模合意形成プラットフォームの実現  | 大沼進<br>(代表：伊藤孝行、他2名)    | 8,000 |
| 共同利用・共同研究拠点「化学汚染・沿岸環境研究拠点」（愛媛大学沿岸環境科学研究センター）共同利用・共同研究 | 2020          | 臭素系難燃剤 BDE-209 がラットの超音波コミュニケーションに及ぼす影響と中枢作用機序の解明 | 和田博美<br>(他2名)           | 100   |

## 資料5 研究業績一覧

2020 年度

### 【著書・分担執筆（洋書）】

Ohnuma, S. (2020). Consensus Building: Process design toward finding a shared recognition of common goal beyond conflicts. In Metcalf, G. S., Kijima, K., & Deguchi, H. (Ed) *Handbook of Systems Sciences*, Springer.

### 【著書・分担執筆（和書）】

和田博美 (2020). 2 章 甦れ脳細胞！. 橋本雄 編. 再一繰り返す世界. 北海道大学出版会.  
河原純一郎 (2020). 3 章 注意の容量. 坂田陽子・日比優子・河西哲子 編. ナカニシヤ出版.  
河原純一郎 (2020). 6 章 注意. 箱田裕司・野島一彦・繁樹算男 編. 知覚・認知心理学. 遠見書房.  
河原純一郎 (印刷中). 研究倫理. 臨床心理学スタンダードテキスト. 金剛出版.  
河西哲子 (2020). 3 章 知覚と認知—適応と学習のために世界を知る働き—. 加藤弘通・川田学 編. 心理学概論—歴史・基礎・応用—. ミネルヴァ書房.  
河西哲子 (2020). 4 章 注意の範囲. 坂田陽子・日比優子・河西哲子 編. ナカニシヤ出版.  
河西哲子 (2020). 9 章 注意の発達と脳波. 坂田陽子・日比優子・河西哲子 編. ナカニシヤ出版.  
久住一郎 (2020). 統合失調症. 永井良三 編. 今日の診断指針 第 8 版. 医学書院.  
久住一郎 (2020). 統合失調症の薬物治療. 笠井清登 編. 講座精神疾患の臨床 2 統合失調症. 中山書店.  
宮内泰介・上田昌文 (2020). 実践 自分で調べる技術. 岩波書店.  
高橋伸幸 (2020). 社会を支える感情. 杉浦義典 編. 公認心理士の基礎と実践⑨ 感情・人格心理学. 遠見書房.

### 【学術雑誌（国際誌）】

Aikawa, K., Yoshida, T., Ohmura, Y., Lyttle, K., Yoshioka, M., & Morimoto, Y. (2020). Subanesthetic ketamine exerts antidepressant-like effects in adult rats exposed to juvenile stress. *Brain Research*, **1746**, 146980, doi:10.1016/j.brainres.2020.146980.

Bell, A. M., Gutierrez-Mecinas, M., Stevenson, A., Casas-Benito, A., Wildner, H., West, S. J., Watanabe, M., & Todd, A. J. (2020). Expression of green fluorescent protein defines a specific population of lamina II excitatory interneurons in the GRP::eGFP mouse. *Scientific reports*, **10**(1), 13176, doi:10.1038/s41598-020-69711-7.

Chiba, H., Kitta, T., Ohmura, Y., Higuchi, M., Kon, M., Nakamura, M., Yoshioka, M., & Shinohara, N. (2020). Serotonin in the rat prefrontal cortex controls the micturition reflex via 5-HT<sub>2A</sub> and 5-HT<sub>7</sub> receptors. *International Journal of Urology*, **27**(8), 684-689, doi:10.1111/iju.14267.

Fujihara, K., Yamada, K., Ichitani, Y., Kakizaki, T., Jiang, W., Miyata, S., Suto, T., Kato, D., Saito, S., Watanabe, M., Kajita, Y., Ohshiro, T., Mushiaki, H., Miyasaka, Y., Mashimo, T., Yasuda, H., & Yanagawa, Y. (2020). CRISPR/Cas9-engineered Gad1 elimination in rats leads to complex behavioral changes: implications for schizophrenia. *Translational psychiatry*, **10**(1), 426, doi:10.1038/s41398-020-01108-6.

Fukabori, R., Iguchi, Y., Kato, S., Takahashi, K., Eifuku, S., Tsuji, S., Hazama, A., Uchigashima, M., Watanabe, M., Mizuma, H., Cui, Y., Onoe, H., Hikishima, K., Yasoshima, Y., Osanai, M., Inagaki, R., Fukunaga, K., Nishijo, T., Momiyama, T., Benton, R., & Kobayashi, K. (2020). Enhanced Retrieval of Taste Associative Memory by Chemogenetic Activation of Locus Coeruleus Norepinephrine Neurons. *The Journal of neuroscience : the official journal of the Society for Neuroscience*, **40**(43), 8367-8385, doi:10.1523/JNEUROSCI.1720-20.2020.

Fukaya, M., Sugawara, T., Hara, Y., Itakura, M., Watanabe, M., & Sakagami, H. (2020). BRAG2a Mediates mGluR-Dependent AMPA Receptor Internalization at Excitatory Postsynapses through the Interaction with PSD-95 and Endophilin 3. *The Journal of neuroscience: the official journal of the Society for Neuroscience*, **40**(22), 4277-4296, doi:10.1523/JNEUROSCI.1645-19.2020.

Hashimoto, N., Michaels, T. I., Hancock, R., Kusumi, I., & Hoeft, F. (2020). Maternal cerebellar gray matter volume is associated with daughters' psychotic experience. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, **74**(7), 392-397, doi:10.1111/pcn.13011.

- Hashimoto, N., Takahashi, K., Fujisawa, D., Aoyama, K., Nakagawa, A., Okamura, N., Toyomaki, A., Oka, M., Takanobu, K., Okubo, R., Narita, H., Kitagawa, K., Udo, N., Maeda, T., Watanabe, S., Oyanagi, Y., Miyazaki, A., Ito, K., & Kusumi, I. (2020). A pilot validation study of the Japanese translation of the Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS). *Asian journal of psychiatry*, 54102210, doi:10.1016/j.ajp.2020.102210.
- Horigane, S., Hamada, S., Kamijo, S., Yamada, H., Yamasaki, M., Watanabe, M., Bito, H., Ohtsuka, T., Takemoto-Kimura, S. (2020). Development of an L-type Ca<sup>2+</sup> channel-dependent Ca<sup>2+</sup> transient during the radial migration of cortical excitatory neurons. *Neuroscience research*, doi:10.1016/j.neures.2020.06.003.
- Ishikawa, S., Kobayashi, M., Hashimoto, N., Mikami, H., Tanimura, A., Narumi, K., Furugen, A., Kusumi, I., & Iseki, K. (2020). Association Between N-Desmethylozapine and Clozapine-Induced Sialorrhea: Involvement of Increased Nocturnal Salivary Secretion via Muscarinic Receptors by N-Desmethylozapine. *Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics*, **375**(2), 376-384, doi:10.1124/jpet.120.000164.
- Ito, M., Kawahara, J. (2020). Search and concealment strategies in the spatiotemporal domain Attention, *Perception, & Psychophysics*, **82**(5), 2393-2414, doi:10.3758/s13414-020-01976-6.
- Itoh, T. D., Takeya, R., & Tanaka, M. (2020). Spatial and temporal adaptation of predictive saccades based on motion inference. *Scientific reports*, **10**(1), 5280, doi:10.1038/s41598-020-62211-8.
- Iwabuchi, T., Ohba, M., Ogawa, K., & Inui, T. (2020). Incongruence of grammatical subjects activates brain regions involved in perspective taking in a sentence-sentence verification task. *Journal of Neurolinguistics*, 55100893, doi:10.1016/j.jneuroling.2020.100893.
- Kakizaki, T., Ohshiro, T., Itakura, M., Konno, K., Watanabe, M., Mushiake, H., & Yanagawa, Y. (2021). Rats deficient in the GAD65 isoform exhibit epilepsy and premature lethality. *FASEB journal: official publication of the Federation of American Societies for Experimental Biology*, **35**(2), e21224, doi:10.1096/fj.202001935R.
- Kakizawa, S., Kishimoto, Y., Yamamoto, S., Onga, K., Yasuda, K., Miyamoto, Y., Watanabe, M., Sakai, R., & Mori, N. (2020). Functional maintenance of calcium store by ShcB adaptor protein in cerebellar Purkinje cells. *Scientific reports*, **10**(1), 14475, doi:10.1038/s41598-020-71414-y.
- Kamnate, A., Sirisin, J., Polsan, Y., Chomphoo, S., Watanabe, M., Kondo, H., & Hipkaco, W. (2021). In situ localization of diacylglycerol lipase  $\alpha$  and  $\beta$  producing an endocannabinoid 2-arachidonoylglycerol and of cannabinoid receptor 1 in the primary oocytes of postnatal mice. *Journal of anatomy*, doi:10.1111/joa.13392.
- Koga, M., Toyomaki, A., Kiso, Y., & Kusumi, I. (2020). Impact of a Rice-Centered Diet on the Quality of Sleep in Association with Reduced Oxidative Stress: A Randomized, Open, Parallel-Group Clinical Trial. *Nutrients*, **12**(10), 2926, doi:10.3390/nu12102926.
- Lee, I-C., Hu, F., & Li, W-Q. (2020). Cultural factors facilitating or inhibiting the support for traditional household gender roles. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **51**(5), 333-352, doi:10.1177/0022022120929089.
- Li, L. M. W., Chen, Q., Gao, H., Li, W-Q., & Ito, K. (2020). Online/offline self-disclosure to offline friends and relational outcomes in a diary study: The moderating role of self-esteem and relational closeness. *International Journal of Psychology*, **56**(1), 129-137, doi:0.1002/ijop.12684.
- Li, L. M. W., Li, W-Q., Mei, D., & Wang, Y. (2020). Self-esteem among Chinese cohorts: Its temporal trend and its relationships with socioecological factors, 1993–2016. *European Journal of Personality*, **34**(2), 203-214, doi:10.1002/per.2238.
- Li, W-Q., Li, L. M. W., Jiang, D., & Liu, S. (2020). Fate control and ingroup bias in donation for the fight with the coronavirus pandemic: The mediating role of risk perception of COVID-19. *Personality and Individual Differences*, 171110456, doi:10.1016/j.paid.2020.110456.
- Maezawa, T., Kawahara, J. (2020). Replicability of the curvature effect as a function of presentation time and response measure in Japanese observers. *i-Perception*, **11**(2), 1-16, doi:10.1177/2041669520915204.
- Maezawa, T., Kawahara, J. (2021). Commonalities of visual and auditory working memory in a spatial-updating task. *Memory & Cognition*, doi:10.3758/s13421-021-01151-8.
- Matsuo, M. (2020). Linking the effects of mindfulness and strengths use on work engagement: Two three-wave longitudinal studies. *Current Psychology*, doi:10.1007/s12144-020-01000-y.
- Matsuo, M. (2020). Influences of developmental job experience and learning goal orientation on employee creativity: Mediating role of psychological empowerment. *Human Resource Development International*, doi:10.1080/13678868.2020.1824449.
- Matsuo, M. (2020). The role of work authenticity in linking strengths use to career satisfaction and proactive behavior: A two-wave study. *Career Development International*, **25**(6), 617-630, doi:10.1108/CDI-01-2020-0015.
- Matsuo, M. (2020). Reflection on Success and failures: Scale development and validation. *Journal of Workplace Learning*, **32**(8), 615-626, doi:10.1108/JWL-07-2020-0117.



- Matsuo, M. (2021). Promoting employee's self-change skills: The role of job characteristics, goal clarity, and learning goals. *International Journal of Training and Development*, **25**(1), 60-76, doi:0.1111/ijtd.12207.
- Matsuo, M. (2021). Reflection on success in promoting authenticity and proactive behavior: A two-wave study. *Current Psychology*, doi:10.1007/s12144-021-01352-z.
- Matsuo, M. (2020). Managers' exploration activities and individual unlearning: The mediating role of learning orientation and reflection. *International Journal of Human Resource Management*, **31**(5), 638-656, doi:10.1080/09585192.2017.1362022.
- Matsuo, M., & Tsukube, T. (2020). A review on cognitive apprenticeship in educational research: Application for management education. *International Journal of Management Education*, **18**(3), doi:10.1016/j.ijme.2020.100417.
- Matsuo, M., & Nagata, M. (2020). A revised model of experiential learning with a debriefing checklist. *International Journal of Training and Development*, **24**(2), 144-153, doi:10.1111/ijtd.12177.
- Matsuo, M., Arai, K., & Matsuo, T. (2020). Effects of managerial coaching on critical reflection: Mediating role of learning goal orientation. *Journal of Workplace Learning*, **32**(3), 217-228, doi:10.1108/JWL-06-2019-0086.
- Matsuo, M., Matsuo, T., & Arai, K. (2021). The influence of an interactive use of management control on individual performance: Mediating roles of psychological empowerment and proactive behavior. *Journal of Accounting & Organizational Change*, **17**(2), 263-281, doi:10.1108/JAOC-06-2020-0079.
- Matsuoka, T., Yamasaki, M., Abe, M., Matsuda, Y., Morino, H., Kawakami, H., Sakimura, K., Watanabe, M., & Hashimoto, K. (2021). Kv11 (ether-à-go-go-related gene) voltage-dependent K<sup>+</sup> channels promote resonance and oscillation of subthreshold membrane potentials. *The Journal of physiology*, **599**(2), 547-569, doi:10.1113/JP280342.
- Milfont, T. L., Thomson, R., & Yuki, M. (2020). Does relational mobility vary across national regions? A within-country examination. *PLOS ONE*, **15**(7), e0235172, doi:10.1371/journal.pone.0235172.
- Miyata, S., Kakizaki, T., Fujihara, K., Obinata, H., Hirano, T., Nakai, J., Tanaka, M., Itohara, S., Watanabe, M., Tanaka, K. F., Abe, M., Sakimura, K., & Yanagawa, Y. (2021). Global knockdown of glutamate decarboxylase 67 elicits emotional abnormality in mice. *Molecular brain*, **14**(1), 5, doi:10.1186/s13041-020-00713-2.
- Miyazaki, T., Yamasaki, M., Tanaka, K. F., & Watanabe, M. (2020). Compartmentalized Input-Output Organization of Lugaro Cells in the Cerebellar Cortex. *Neuroscience*, doi:10.1016/j.neuroscience.2020.05.026.
- Morishita, C., Kameyama, R., Toda, H., Masuya, J., Ichiki, M., Kusumi, I., & Inoue, T. (2020). Utility of TEMPS-A in differentiation between major depressive disorder, bipolar I disorder, and bipolar II disorder. *PloS One*, **15**(5), e0232459, doi:10.1371/journal.pone.0232459.
- Nakamoto, C., Kawamura, M., Nakatsukasa, E., Natsume, R., Takao, K., Watanabe, M., Abe, M., Takeuchi, T., & Sakimura, K. (2020). GluD1 knockout mice with a pure C57BL/6N background show impaired fear memory, social interaction, and enhanced depressive-like behavior. *PloS One*, **15**(2), e0229288, doi:10.1371/journal.pone.0229288.
- Nakamoto, C., Konno, K., Miyazaki, T., Nakatsukasa, E., Natsume, R., Abe, M., Kawamura, M., Fukazawa, Y., Shigemoto, R., Yamasaki, M., Sakimura, K., & Watanabe, M. (2020). Expression mapping, quantification, and complex formation of GluD1 and GluD2 glutamate receptors in adult mouse brain. *The Journal of comparative neurology*, **528**(6), 1003-1027, doi:10.1002/cne.24792.
- Nebuka, M., Ohmura, Y., Izawa, S., Boucheikioua, Y., Nishitani, N., Yoshida, T., & Yoshioka, M. (2020). Behavioral Characteristics of 5-HT<sub>2C</sub> Receptor Knockout Mice: Locomotor activity, Anxiety-, and Fear Memory-related Behaviors. *Behavioural Brain Research*, 379112394, doi:10.1016/j.bbr.2019.112394
- Ohata, R., Asai, T., Kadota, H., Shigemasa, H., Ogawa, K., & Imamizu, H. (2020). Sense of Agency Beyond Sensorimotor Process: Decoding Self-Other Action Attribution in the Human Brain. *Cerebral cortex (New York, N.Y. : 1991)*, **30**(7), 4076-4091, doi:10.1093/cercor/bhaa028.
- Ohmura, Y., Tsutsui-Kimura, I., Sasamori, H., Nebuka, M., Nishitani, N., Tanaka, K. F., Yamanaka, A., & Yoshioka, M. (2020). Different roles of distinct serotonergic pathways in anxiety-like behavior, antidepressant-like, and anti-impulsive effects. *Neuropharmacology*, 167107703, doi:10.1016/j.neuropharm.2019.107703.
- Ohtomo, S., Hirose, Y., & Ohnuma, S. (2020). Public acceptance model for siting a repository of radioactive contaminated waste. *Journal of Risk Research*, **24**(2), 215-227, doi:10.1080/13669877.2020.1750457.
- Pidsaya, A., Kamnate, A., Sirisin, J., Watanabe, M., Kondo, H., & Hipkaco, W. (2020). Different expression and subcellular localization of vesicular inhibitory amino acid transporter in ducts of major salivary glands: An in situ study in mice. *Archives of oral biology*, 113104689, doi:10.1016/j.archoralbio.2020.104689.
- Polgár, E., Bell, A. M., Gutierrez-Mecinas, M., Dickie, A. C., Akar, O., Costreie, M., Watanabe, M., & Todd, A. J. (2020). Substance P-expressing Neurons in the Superficial Dorsal Horn of the Mouse Spinal Cord: Insights into Their Functions



- and their Roles in Synaptic Circuits. *Neuroscience*, 450113-125, doi:10.1016/j.neuroscience.2020.06.038.
- Sacai, H., Sakoori, K., Konno, K., Nagahama, K., Suzuki, H., Watanabe, T., Watanabe, M., Uesaka, N., & Kano, M. (2020). Autism spectrum disorder-like behavior caused by reduced excitatory synaptic transmission in pyramidal neurons of mouse prefrontal cortex. *Nature communications*, **11**(1), 5140, doi:10.1038/s41467-020-18861-3.
- Scott, J., Bellivier, F., Manchia, M., Schulze, T., Alda, M., Etain, B., Cervantes, P., Garnham, J., Nunes, A., O'Donovan, C., Slaney, C., Bauer, M., Pfennig, A., Reif, A., Kittel-Schneider, S., Veeh, J., del Zompo, M., Arda, R., Chillotti, C., Severino, G., Kato, T., Ozaki, N., Kusumi, I., Hashimoto, R., Akiyama, K., & Kelso, J. (2020). Can network analysis shed light on predictors of lithium response in bipolar I disorder? *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **141**(6), 522-533, doi:10.1111/acps.13163
- Shahrier, M. A., & Wada, H. (2020). Effects of prenatal ethanol exposure on acoustic characteristics of play fighting-induced ultrasonic vocalizations in juvenile rats. *Neurotoxicology*, 7925-39, doi:10.1016/j.neuro.2020.03.016.
- Shiotani, H., Miyata, M., Kameyama, T., Mandai, K., Yamasaki, M., Watanabe, M., Mizutani, K., & Takai, Y. (2020). Nectin-2 $\alpha$  is localized at cholinergic neuron dendrites and regulates synapse formation in the medial habenula. *The Journal of comparative neurology*, **529**(2), 450-477, doi:10.1002/cne.24958.
- Suzuki, K., Elegheert, J., Song, I., Sasakura, H., Senkov, O., Matsuda, K., Kakegawa, W., Clayton, A. J., Chang, V. T., Ferrer-Ferrer, M., Miura, E., Kaushik, R., Ikeno, M., Morioka, Y., Takeuchi, Y., Shimada, T., Otsuka, S., Stoyanov, S., Watanabe, M., Takeuchi, K., Dityatev, A., Aricescu, A. R., & Yuzaki, M. (2020). A synthetic synaptic organizer protein restores glutamatergic neuronal circuits. *Science*, **369**(6507), doi:10.1126/science.abb4853.
- Szocsics, P., Papp, P., Havas, L., Watanabe, M., & Maglóczy, Z. (2021). Perisomatic innervation and neurochemical features of giant pyramidal neurons in both hemispheres of the human primary motor cortex. *Brain structure & function*, **226**(1), 281-296, doi:10.1007/s00429-020-02182-8.
- Takase, T., Nakamura, A., Miyoshi, H., Koga, M., Toyomaki, A., Kusumi, I., Kino, R., Konishi, Y., Kiso, Y., Atsumi, T. (2020). Effects of *Palmaria palmata* on lipid metabolism and glycemic control in participants with hypercholesterolemia in a randomized double-blind placebo-controlled trial. *Phytotherapy Research*, **34**(9), 2303-2312, doi:10.1002/ptr.6680.
- Tanaka, M., Kunimatsu, J., Suzuki, T. W., Kameda, M., Ohmae, S., Uematsu, A., & Takeya, R. (2020). Roles of the Cerebellum in Motor Preparation and Prediction of Timing. *Neuroscience*, doi:10.1016/j.neuroscience.2020.04.039.
- Tanda, T., Kawahara, J. (2020). An object-based template for rejection effect. *Visual Cognition*, **28**(2), 87-96, doi:10.1080/13506285.2020.1722774.
- Terashima, H., Kihara, K., Kawahara, J., & Kondo, H. M. (2020). Common principles underlie the fluctuation of auditory and visual sustained attention. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, doi:10.1177/1747021820972255.
- Toyoshima, K., Inoue, T., Masuya, J., Fujimura, T., Higashi, S., Tanabe, H., Kusumi, I. (2020). Structural equation modeling approach to explore the influence of childhood maltreatment in adults. *PLoS One*, **15**(10), e0239820, doi:10.1371/journal.pone.0239820.
- Toyoshima, K., Inoue, T., Masuya, J., Fujimura, Y., Higashi, S., & Kusumi, I. (2020). Associations among childhood parenting, affective temperaments, depressive symptoms, and cognitive complaints in adult community volunteers. *Journal of Affective Disorders*, 276361-368, doi:10.1016/j.jad.2020.07.107.
- Toyoshima, K., Inoue, T., Masuya, J., Fujimura, Y., Higashi, S., & Kusumi, I. (2020). Does Subjective Cognitive Function Mediate the Effect of Affective Temperaments on Functional Disability in Japanese Adults?. *Neuropsychiatric Disease and Treatment*, 161675-1684, doi:10.2147/ndt.s256647.
- Toyoshima, K., Inoue, T., Shimura, A., Masuya, J., Ichiki, M., Fujimura, Y., & Kusumi, I. (2020). Associations between the depressive symptoms, subjective cognitive function, and presenteeism of Japanese adult workers: a cross-sectional survey study. *BioPsychoSocial Medicine*, **14**(1), 10, doi:10.1186/s13030-020-00183-x.
- Toyoshima, K., Toyomaki, A., Miyazaki, A., Martinez-Aran, A., Vieta, E., & Kusumi, I. (2020). Associations between cognitive impairment and P300 mean amplitudes in individuals with bipolar disorder in remission. *Psychiatry Research*, 290113125, doi:10.1016/j.psychres.2020.113125.
- Tsukube, T., & Matsuo, M. (2020). The impact of cognitive apprenticeship on the perceived growth of junior doctors. *Journal of Workplace Learning*, **32**(7), 489-499, doi:10.1108/JWL-04-2020-0055.
- Uchigashima, M., Konno, K., Demchak, E., Cheung, A., Watanabe, T., Keener, D. G., Abe, M., Le, T., Sakimura, K., Sasaoka, T., Uemura, T., Imamura-Kawasawa, Y., Watanabe, M., & Futai, K. (2020). Specific Neuroligin3- $\alpha$ Neurexin1 signaling regulates GABAergic synaptic function in mouse hippocampus. *eLife*, 9e59545, doi:10.7554/eLife.59545.

- Uchigashima, M., Leung, M., Watanabe, T., Cheung, A., Le, T., Pallat, S., Dinis, A. L. M., Watanabe, M., Imamura-Kawasawa, Y., & Futai, K. (2020). Neuroligin3 splice isoforms shape inhibitory synaptic function in the mouse hippocampus. *The Journal of biological chemistry*, 295(25), 8589-8595, doi:10.1074/jbc.AC120.012571.
- Udo, N., Hashimoto, N., Toyonaga, T., Itoyama, T., Oyanagi, Y., Narita, H., Shiga, T., Nakagawa, S., & Kusumi, I. (2020). Apathy in Alzheimer's Disease Correlates with the Dopamine Transporter Level in the Caudate Nuclei *Dementia and Geriatric Cognitive Disorders Extra*, 10(2), 86-93, doi:10.1159/000509278.
- Valle-León, M., Callado, L. F., Aso, E., Cajiao-Manrique, M. M., Sahlholm, K., López-Cano, M., Soler, C., Altafaj, X., Watanabe, M., Ferré, S., Fernández-Dueñas, V., Menchón, J. M., Ciruela, F. (2020). Decreased striatal adenosine A2A-dopamine D2 receptor heteromerization in schizophrenia. *Neuropsychopharmacology*, 46665-672, doi:10.1038/s41386-020-00872-9.
- Wakatsuki, Y., Inoue, T., Hashimoto, N., Fujimura, Y., Masuya, J., Ichiki, M., Tanabe, H., & Kusumi, I. (2020). Influence of Childhood Maltreatment, Adulthood Stressful Life Events, and Affective Temperaments on Premenstrual Mental Symptoms of Nonclinical Adult Volunteers. *Neuropsychiatric Disease and Treatment*, 161-10, doi:10.2147/ndt.s232925.
- Yamauchi, K., Kawahara, J. (2020). Inhibitory template for visual marking with endogenous spatial cueing. *Visual Cognition*, 28(10), 581-604, doi:10.1080/13506285.2020.1842834.
- Yamazaki, K., Kawabori, M., Seki, T., Takamiya, S., Tateno, T., Konno, K., Watanabe, M., & Houkin, K. (2020). FTY720 Attenuates Neuropathic Pain after Spinal Cord Injury by Decreasing Systemic and Local Inflammation in a Rat Spinal Cord Compression Model. *Journal of neurotrauma*, 37(15), 1720-1728, doi:10.1089/neu.2019.6905.
- Yang, H., Hu, Z., Imai, F., Yang, Y., & Ogawa, K. (2021). Effects of neurofeedback on the activities of motor-related areas by using motor execution and imagery. *Neuroscience letters*, 746135653, doi:10.1016/j.neulet.2021.135653.
- Yoshida, K., Takeda, K., Kasai, T., Makinae, S., Murakami, Y., Hasegawa, A., & Sakai, S. (2020). Focused attention meditation training modifies neural activity and attention: longitudinal EEG data in non-meditators. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 15215-224, doi:10.1093/scan/nsaa020.
- Yuki, M., Schug, J. (2020). Psychological consequences of relational mobility. *Current Opinion in Psychology*, 32129-132, doi:10.1016/j.copsyc.2019.07.029.

## 【学術雑誌（国内誌）】

- 前田洋枝・広瀬幸雄・大沼進・大友章司 (2020). 革新的エネルギー・環境戦略の社会的受容の規定因—「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」の手続き的公正に注目して—。環境科学会誌, 33(2), 24-41, doi:10.11353/sesj.33.24.
- 前澤知輝・宮崎由樹・松長芳織・柴田彰・河原純一郎 (2020). 衛生マスクへの着香が花粉症の不快感低減に及ぼす効果とその時間的推移。人間工学, 56(1), 29-33, doi:10.5100/jje.56.29.
- 水鳥翔伍・大沼進 (2020). 札幌市真駒内地区における住民の環境に配慮した移動手段利用意図の規定因。環境心理学研究, 8(1), 16-25, doi:10.20703/jenvpsy.8.1\_16
- 篠田 朝也・丸田 起大 (2020). 製品開発段階における原価目標設定の効果と課題—実験室実験の結果から—。会計理論学会年報, 34, 72-82.
- 大杉尚之・河原純一郎 (2020). お辞儀と顔の外見的特徴が主観的魅力に及ぼす影響。認知心理学研究, 17(2), 69-77.
- 尾崎一郎 (2020). 区分所有法：法社会学的考察。新注釈民法 物権 2.
- 尾崎一郎 (2020). 科学という見果てぬ夢。法学セミナー, 66(1), 34-39.
- 尾崎一郎 (2020). 放置不動産と人格的価値(上)。法律時報, 92(11), 118-123.
- 尾崎一郎 (2020). 放置不動産と人格的価値(下)。法律時報, 92(12), 107-113.
- 尾崎一郎 (2020). 特集 外国法の参照 企画趣旨。法律時報, 92(4), 4-5.
- 尾崎一郎 (2020). 虚構を暴き、虚構に生きる。小坂井敏晶『増補 責任という虚構』ちくま学芸文庫, 489-504.
- 舘石和香葉・小野田竜一・高橋伸幸 (2021). 罰行使の動機推定が評判に与える影響：複数の罰選択肢を用いた検討。社会心理学研究, 36(3), 96-103, doi:10.14966/jssp.1916.
- 上田江里子・久保孝富・村重哲史・永澤美保・池田和司・瀧本(猪瀬)彩加 (2020). ウマ(Equus caballus)とヒトにおける歩行同期の実証的検討。動物心理学研究, 70(2), 27-39, doi:10.2502/janip.70.2.1.
- 横山実紀・大沼進・近藤由基 (2021). 除去土壌再生利用の社会的受容に負担の不平衡緩和が及ぼす効果。心理学研究, 91(6), 378-387, doi:10.4992/jjpsy.91.19048.

## 【学会発表（国際学会）】

- Jin, A., Yuki, M., & Talhelm, T. (2021). The Effects of Rice Cultivation Style on People's Psychological Tendencies: Comparing North and South Vietnam. *2021 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Li, W-Q., Yuki, M., & Ishiyama, A. (2021). Cultural Differences in Direct Versus Indirect Social Control: The Role of Relational Mobility. *2021 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Maeda, Y., & Yuki, M. (2020). Lower relational mobility leads to stronger embarrassment for success. The mediating role of "tall poppy belief". *2020 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Maeda, Y., & Yuki, M. (2021). Why does relational mobility affect pride and embarrassment for success? A test of a signaling function hypothesis. *2021 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Maezawa, T., Tanda, T., & Kawahara, J. (2020). Preference for curved contours using various presentation times and response measures. *Vision Sciences Society 20th Annual meeting*.
- Okuyama, A., & Yuki, M. (2020). Are There Cultural Differences in Positive Empathy? The Role of Relational Mobility. *2020 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Sasamori, H., Ohmura, Y., & Yoshioka, M. (2020). Noradrenaline reuptake inhibition increases control of impulsive action by activating D1-like receptors in the infralimbic cortex. *The 10th Takeda Science Foundation Symposium on PharmaSciences*.
- Yamauchi, K., & Kawahara, J. (2020). An endogenous invalid cue degrades the inhibitory template for visual marking. *Virtual Vision Sciences Society 2020*.
- Yuki, M., Maeda, Y., Li, W-Q., & Zhang, F. (2020). Low Relational Mobility, Fear of Sticking Out, and Embarrassment about Remarkable Contributions in the East Asian Ecological Context, *2020 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Zhang, D., & Wada, H. (2020). Effects of group housing on chronic stress-induced emotional behavior in female rats. *6th Inter-Faculty Symposium in Hokkaido University*.

## 【学会発表（国内学会）】

- 晴木祐助・小川健二 (2020). 心-身-脳の関係を探る:内受容感覚の神経基盤にかかわる基礎的検討. 北海道大学第6回部局横断シンポジウム.
- 今井史・篠崎淳・齊藤秀和・長濱宏史・櫻井佑樹・長峯隆・小川健二 (2020). 運動実行と筋感覚運動イメージに共通した一次運動野の神経表象. 日本イメージ心理学会第21回大会.
- 伊藤資浩・反田智之・河原純一郎 (2020). 顔面のほくろの分布と魅力的なほくろの位置. 日本心理学会第84回大会.
- 鎌谷美希・伊藤資浩・宮崎由樹・河原純一郎 (2020). 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行による黒色衛生マスク着用者への顕在的態度の変容. 日本基礎心理学会第39回大会.
- 鎌谷美希・伊藤資浩・宮崎由樹・河原純一郎 (2020). 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行による黒色衛生マスク着用者への顕在的態度の変容. 日本基礎心理学会第39回大会.
- 木立航輔・和田博美 (2020). "レジデント—イントルーダーパラダイムにおけるヒト型自閉症モデルマウスの超音波コミュニケーション". 第6回北海道大学部局横断シンポジウム.
- 久住一郎 (2020). こころの健康と睡眠について. 美瑛町精神保健講演会（こころの健康づくり教室）.
- 久住一郎 (2020). 気分障害のリカバリーを考える—認知機能の視点から—. 東北心療内科 MDD セミナー（仙台）.
- 久住一郎 (2020). 症例報告における倫理的配慮について. 日本精神神経学会指導医講習会（東京）.
- 久住一郎 (2020). 統合失調症に合併する糖脂質代謝障害をいかに予防するか. ロナセンテブ発売1周年記念講演会 in 宮城.
- 前澤知輝・河原純一郎 (2020). 迷路歩行作業記憶課題における視聴覚手がかりの空間優位性. 日本基礎心理学会第39回大会.
- 前澤知輝・反田智之・河原純一郎 (2020). 刺激呈示時間と評価法の操作が物体の丸み効果に与える影響. 日本心理学会第84回大会.
- 前田友吾・結城雅樹 (2020). 関係流動性が成功状況での感情経験に影響するメカニズム シグナリング仮説の検討. 日本社会心理学会第61回大会（ワークショップ『ネクスト社会神経科学—個と社会環境のダイナミクス』）.
- 水鳥翔伍・大沼進・Hommerich, C. (2020). 社会関係資本は環境配慮行動を促進するか—札幌市での社会調査—. 日本環境心理学会第13回大会.
- 小川健二 (2020). 共感性と視点取得に関わる神経基盤と発達過程. 第10回社会神経科学研究会.

大村優・岩見謙太郎・笹森瞳・杉浦千瑛・Boučekioua, Y.・吉岡充弘 (2021). 背側縫線核セロトニン神経活動はモデルベース的意思決定に必要とされる. 第 94 回日本薬理学会年会.

大沼進・横山実紀・土田茜 (2020). 高レベル放射性廃棄物地層処分の社会的受容を巡る分配的公正と手続き的公正の諸相. 日本社会心理学会第 61 回大会.

笹森瞳・西谷直也・大村優・吉岡充弘 (2021). 非定型抗精神病薬ブロナンセリンと 1-(2-ピリミジル)-ピペラジンはラットの衝動的行動を抑制する. 第 94 回日本薬理学会年会.

澤頭亮・田中真樹 (2020). N-back 課題中の前頭連合野ニューロンの活動. 第 100 回北海道医学大会生理系分科会.

澤頭亮・田中真樹 (2020). 新規採餌行動課題を用いた作業記憶の定量的評価. 第 97 回日本生理学会大会.

佐藤和成・水鳥翔伍・白川満由花・大沼進・Hommerich, C. (2020). ソーシャルキャピタルと幸福感の関連の総合的検討—札幌市における社会調査から—, 日本環境心理学会第 13 回大会.

柴田寛・小川健二 (2020). 外的な聴覚刺激から内的な聴覚表象への変換に関わる脳内基盤: fMRI 研究. 日本心理学会第 83 回大会.

瀧本(猪瀬)彩加・井上真緒・河合正人 (2020). ウマにおける利他行動—食物共有課題を用いた実験的検討—. 日本人間行動進化学会第 13 回大会.

竹谷隆司・田中真樹 (2020). 小脳による同期性眼球運動のタイミング制御. 第 100 回北海道医学大会生理系分科会.

舘石和香葉・高橋伸幸 (2020). 集団を越えた協力行動は、集団内の評判を低下させるのか?—普遍主義者と集団主義者の評判比較—. 日本社会心理学会第 61 回大会.

舘石和香葉・高橋伸幸 (2020). 協力・非協力の決定時間が評判に与える影響. 第 13 回日本人間行動進化学会.

豊森開・河原純一郎 (2020). ネガティブな顔写真と漫画顔・線画顔への注意バイアス. 日本基礎心理学会第 39 回大会.

鶴見周摩・金沢創・山口真美・河原純一郎 (2020). 乳児における covert attention の発達過程. 日本基礎心理学会第 39 回大会.

山内健司・河原純一郎 (2020). 広告におけるモデルの顔方向とキャッチコピーによる時間操作が商品魅力に及ぼす影響. 日本心理学会第 84 回大会.

楊惠翔・今井史・小川健二 (2020). 心的時間測定法、運動イメージの質問紙法 および時間感覚能力の関係性に関する検討. 日本イメージ心理学会第 21 回大会.

横山実紀・大沼進・土田茜 (2020). 無知のヴェールと段階的意思決定が高レベル放射性廃棄物地層処分立地の社会的受容に与える効果. 日本社会心理学会第 61 回大会.

横山実紀・大沼進・近藤由基 (2020). 除去土壌再生利用は全国で広く負担を分担することが社会的受容を高める. 日本環境心理学会第 13 回大会.

結城雅樹 (2020). 指定討論. 日本社会心理学会第 61 回大会 (ワークショップ『ネクスト社会神経科学—個と社会環境のダイナミクス』).

和田知里・勝野吏子・足立幾磨・河合正人・瀧本(猪瀬)彩加 (2020). 母ウマに対する子ウマの音声の発声文脈の発達的变化についての探索的検討. 日本動物行動学会第 39 回大会.

山内健司・河原純一郎 (2020). 広告におけるモデルの顔方向とキャッチコピーによる時間操作が商品魅力に及ぼす影響. 日本心理学会第 84 回大会.

## 【ワーキングペーパー】

本センターは、21COE「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点」(CEFOM/21)において刊行された 72 本のワーキングペーパーを継承し、現在までに約 150 本の論文を北海道大学社会科学実験研究センター (CERSS) ワーキングペーパーとして発行している。

No.73 以降のワーキングペーパーのアブストラクトは社会科学実験研究センターのホームページ (<http://lynx.let.hokudai.ac.jp/cerss/>) において閲覧することができる。また、論文全体をダウンロードすることもできる。これらのサービスは社会科学実験研究センターの研究成果の社会還元活動の一つとして行われている。

## 資料 6 学外研究機関との共同研究による施設利用実績

### 学外研究機関との共同研究実施実績

社会科学実験研究センターの実験施設は、学内外の研究者が利用可能な共同利用施設である。

2020 年度は新型コロナウイルスの影響により対面実験の実施が制限され、当初予定されていた外部研究者による施設の利用も中止となった。しかしながら、そのうち 2 件の当センター兼務教員との共同研究による Web 実験が、センターの保有する実験参加者登録システムを使用して実施された(参加者総数は 502 名)。

## 資料 7 アウトリーチ活動

本センターでは、研究成果を広く一般の市民と共有するために、アウトリーチ活動の推進につとめている。

2020 年度において、本センターの構成員が行ったアウトリーチ活動を以下に示す。

| 日付         | タイトル                                                                             | 活動内容 | 実施者   |
|------------|----------------------------------------------------------------------------------|------|-------|
| 2020/6/28  | 「認知心理学から見た 気付く・気付かない広告」<br>(認定心理士オンラインイベント Net de 交流)                            | 講演   | 河原純一郎 |
| 2020/9/17  | 「認知心理学から見た 気付く・気付かない広告」<br>(札幌消費者協会)                                             | 講演   | 河原純一郎 |
| 2020/10/25 | 「インターネット通信販売広告における消費者の認知行動」(全国消費生活相談員協会)                                         | 講演   | 河原純一郎 |
| 2020/10/27 | 「注意と魅力の心理学」(旭川永嶺高等学校)                                                            | 講演   | 河原純一郎 |
| 2021/2/17  | 「注意の制御」(応用脳科学アカデミーワークショップ)                                                       | 講演   | 河原純一郎 |
| 2020.10.30 | 「統合失調症に合併する糖脂質代謝障害をいかに予防するか」(ロナセンテープ発売 1 周年記念講演会 in 宮城)                          | 講演   | 久住一郎  |
| 2020.11.30 | 「気分障害のリカバリーを考える～認知機能の視点から～」(東北心療内科 MDD セミナー)                                     | 講演   | 久住一郎  |
| 2021.1.22  | 「新型コロナウイルス感染拡大時のうつと不安」                                                           | 講演   | 久住一郎  |
| 2020/5/4   | 「COVID-19: リスクガバナンスの観点」の翻訳<br>(日本リスク学会)                                          | 翻訳   | 大沼進   |
| 2020/11/24 | 「海洋ごみの発生抑制対策」<br>(「平成 31 年度海洋ごみ削減のための複数自治体等連携による発生抑制対策等モデル事業等」実証試験結果報告会(岡山県津山市)) | 講演   | 大沼進   |

|            |                                                                                             |    |     |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|----|-----|
| 2020/11/25 | 「海洋ごみの発生抑制対策」<br>(「平成 31 年度海洋ごみ削減のための複数自治体等連携<br>による発生抑制対策等モデル事業等」実証試験結果報告<br>会 (三重県四日市市) ) | 講演 | 大沼進 |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|----|-----|



### (1) 兼務教員一覧

|       |                              |
|-------|------------------------------|
| 大沼進   | 文学研究院・教授、社会科学実験研究センター・センター長  |
| 渡辺雅彦  | 医学研究院・教授、社会科学実験研究センター・副センター長 |
| 和田博美  | 文学研究院・教授                     |
| 宮内泰介  | 文学研究院・教授                     |
| 尾崎一郎  | 法学研究科附属高等法政教育研究センター・教授       |
| 松尾睦   | 経済学研究院・教授                    |
| 篠田朝也  | 経済学研究院・准教授                   |
| 吉岡充弘  | 医学研究院・教授                     |
| 久住一郎  | 医学研究院・教授                     |
| 田中真樹  | 医学研究院・教授                     |
| 結城雅樹  | 文学研究院・准教授                    |
| 高橋泰城  | 文学研究院・准教授                    |
| 高橋伸幸  | 文学研究院・准教授                    |
| 竹澤正哲  | 文学研究院・准教授                    |
| 小川健二  | 文学研究院・准教授                    |
| 瀧本彩加  | 文学研究院・准教授                    |
| 河原純一郎 | 文学研究院・准教授                    |
| 河西哲子  | 教育学研究院・教授                    |
| 中島晃   | 文学研究院・助教                     |

### (2) 連携研究員一覧

|                   |                         |
|-------------------|-------------------------|
| 坂上雅道              | 玉川大学脳科学研究所、大学院脳情報研究科・教授 |
| 亀田達也              | 東京大学大学院人文社会系研究科・教授      |
| 増田貴彦              | アルバータ大学・准教授             |
| Harvey Whitehouse | オックスフォード大学・教授           |
| Kim-Pong Tam      | 香港科技大学・准教授              |
| 仲真紀子              | 立命館大学総合心理学部・教授          |

### (3) 運営委員会委員一覧

|      |                        |
|------|------------------------|
| 大沼進  | 文学研究科・教授、社会科学実験研究センター長 |
| 渡辺雅彦 | 医学研究院・教授               |
| 宮内泰介 | 文学研究院・教授               |



|       |                    |
|-------|--------------------|
| 相原基大  | 経済学研究院・准教授         |
| 谷本陽一  | 地球環境科学研究院・教授       |
| 田畑伸一郎 | スラブ・ユーラシア研究センター・教授 |
| 小川健二  | 文学研究院・准教授          |
| 尾崎一郎  | 法学研究科・教授           |
| 河西哲子  | 教育学研究院・准教授         |
| 松尾睦   | 経済学研究院・教授          |

#### (4) 研究倫理委員会委員一覧

|      |                      |
|------|----------------------|
| 高橋伸幸 | 文学研究院・教授             |
| 松尾睦  | 経済学研究院・教授            |
| 石井敬子 | 名古屋大学情報学研究科・准教授      |
| 河合正人 | 北方生物圏フィールド科学センター・准教授 |

#### (5) 点検評価委員会委員一覧

|      |                        |
|------|------------------------|
| 大沼進  | 文学研究院・教授、社会科学実験研究センター長 |
| 結城雅樹 | 文学研究院・教授               |
| 石井敬子 | 神戸大学人文学研究科・准教授（外部委員）   |
| 池田徹  | 文学研究科・文学部事務長           |

## 付録 2 関連規程及び内規

---

北海道大学社会科学実験研究センター規程

北海道大学社会科学実験研究センター運営委員会規程

北海道大学社会科学実験研究センター研究倫理委員会内規

北海道大学社会科学実験研究センター点検評価内規

# 北海道大学社会科学実験研究センター規程

平成19年4月1日

海大達第203号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人北海道大学組織規則（平成16年海大達第31号）第36条第7項の規定に基づき、北海道大学社会科学実験研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、本学の学内共同施設として、社会科学実験に関する研究を行うとともに、社会科学実験分野における人材の育成、研究成果の国内外への発信、及び国内外の研究拠点との連携の強化を促進することにより、社会科学実験に関する教育研究の進展に資することを目的とする。

(職員)

第3条 センターに、センター長その他必要な職員を置く。

(センター長)

第4条 センター長は、本学の専任の教授をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務を掌理する。

3 センター長の任期は、2年とする。

4 センター長は、再任されることができる。

5 センター長は、第6条に規定する運営委員会の議を経て、総長が選考する。

(副センター長)

第4条の2 センターに、副センター長を置くことができる。

2 副センター長は、次条に規定するセンターの業務を兼務する教授をもって充てる。

3 副センター長は、センター長の職務を助け、センター長に事故があるときは、その職務を代理する。

4 副センター長の任期は、2年とする。ただし、その任期の末日は、センター長の任期の末日以前とする。

5 副センター長は、再任されることができる。

6 副センター長は、センター長の推薦に基づき、総長が任命する。

(兼務教員)

第5条 センターに、本学の専任教員又はこれと同等の能力を有する本学の職員のうちから、センターの業務を兼務する者（以下この条において「兼務教員」という。）を置く。

2 兼務教員の兼務は、次条に規定する運営委員会の議を経て、総長が命ずる。

3 兼務教員の兼務の期間は、2年とする。

(運営委員会)

第6条 センターに、センターに関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 運営委員会の組織及び運営については、別に定める。

(研究員)

第7条 センターに、研究員を置くことができる。

2 研究員は、本学の教員又は本学以外の研究機関において社会科学実験に関する研究に従事している者をもって充てる。

3 研究員は、センター長の推薦に基づき、総長が委嘱する。

4 研究員の任期は、毎年4月1日から翌年3月31日までの間の一定期間とする。

(研究生)

第8条 センターにおいて、特定の専門事項について研究しようとする者がある場合は、センターにおいて適当と認め、かつ、支障のないときに限りこれを研究生として許可する。

2 研究生の受入れについては、北海道大学研究生規程（平成3年海大達第3号）の定めるところによる。

(利用)

第9条 センターの利用に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

(雑則)

第10条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関して必要な事項は、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則（平成24年4月1日海大達第77号）

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則（平成26年4月1日海大達第145号）

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則（平成27年4月1日海大達第173号）

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成27年10月9日海大達第256号）

この規程は、平成27年10月9日から施行する。

# 北海道大学社会科学実験研究センター運営委員会規程

平成19年4月1日

海大達第204号

(趣旨)

第1条 この規程は、北海道大学社会科学実験研究センター規程（平成19年海大達第203号。第3条第1項において「センター規程」という。）第6条第2項の規定に基づき、北海道大学社会科学実験研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、国立大学法人北海道大学における教授会への意見聴取事項等に係る規程（平成27年海大達第42号。次項において「意見聴取規程」という。）第2条第1号及び第6号から第10号までに掲げる事項を審議し、総長に意見を述べるものとする。

2 委員会は、前項に定める事項のほか、北海道大学社会科学実験研究センター（以下「センター」という。）の教員の人事に関する事項（意見聴取規程第2条第6号から第10号までに掲げる事項を除く。）その他運営に関する重要事項を審議する。

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

(1) センター長

(2) 副センター長

(3) 文学研究科，法学研究科，教育学研究院，メディア・コミュニケーション研究院，経済学研究院及び公共政策学連携研究部の教授又は准教授のうちから 2名

(4) 情報科学研究科，水産科学研究院，地球環境科学研究院，理学研究院，薬学研究院，農学研究院，先端生命科学研究院，保健科学研究院，工学研究院，医学研究院，歯学研究院及び獣医学研究院の教授又は准教授のうちから 1名

(5) 附置研究所，研究センター及び学内共同施設の教授又は准教授のうちから 1名

(6) センター規程第5条に規定するセンターの業務を兼務する教授又は准教授（国立大学法人北海道大学特任教員就業規則（平成18年海大達第35号）第3条第2号に該当する特任教授又は特任准教授の職にある者を含む。）のうちから 4名

(7) その他総長が必要と認めた者

2 前項第3号から第7号までの委員は、総長が委嘱する。ただし、同項第3号から第5号までの委員の委嘱は当該教育研究組織の長の推薦に基づくものとし、同項第6号の委員の委嘱はセンター長の推薦に基づくものとする。

(任期)

第4条 前条第1項第3号から第7号までの委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の3分の2以上の出席がなければ議事を開くことができない。

2 委員会の議事は、別に定める事項を除き、出席委員の過半数をもって決するものとする。

(委員以外の者の出席)

第7条 委員会が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第8条 委員会に専門的事項を審議するため、必要に応じて専門委員会を置くことができる。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、文学研究科・文学部事務部において処理する。

(雑則)

第10条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則 (平成20年4月1日海大達第102号)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則 (平成22年4月1日海大達第144号)

この規程は、平成22年4月1日から施行する。

附 則 (平成24年4月1日海大達第77号)

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則 (平成26年4月1日海大達第146号)

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則 (平成27年4月1日海大達第174号)

1 この規程は、平成27年4月1日から施行する。

2 この規程の施行後、最初に委嘱される第3条第1項第3号及び第4号の委員の任期は、第4条第1項ただし書きの規定にかかわらず、平成29年3月31日までとする。

附 則 (平成29年4月1日海大達第152号)

1 この規程は、平成29年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際現に改正前の第3条第3項の規定による委員である経済学研究科の教授（以下この項において「旧委員」という。）は、この規程の施行の日に、改正後の第3条第3項の規定による委員に委嘱されたものとみなす。この場合において、その委嘱されたものとみなされる者の委員としての任期は、改正後の第4条第1項本文の規定にかかわらず、同日における旧委員としての任期の残任期間と同一の期間とする。

# 北海道大学社会科学実験研究センター研究倫理委員会内規

(設置)

第1条 北海道大学社会科学実験研究センター（以下「本センター」という。）で行われる人間を対象とした実験研究について研究倫理に関する事項を審査することを目的として、本センターに北海道大学社会科学実験研究センター研究倫理委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(審査)

第2条 委員会は、人間を対象とした実験研究に関して、申請された研究計画の内容について次に掲げる事項について審査を行う。

- (1) 実験研究の対象となる者（以下「研究対象者」という。）の人権の擁護のための配慮に関する事項
- (2) 研究対象者（必要に応じて研究対象者の家族等を含む。）に理解を求め、同意を得る方法に関する事項
- (3) 研究の実施及び研究成果の利用に伴って生ずる研究対象者への不利益及び危険性に対する配慮に関する事項
- (4) その他人間を対象とした実験研究に関する事項

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 本センターの専任教員
- (2) 本センターの兼務教員（センター長を除く。） 若干名
- (3) 本センター以外の学識経験者 若干名
- (4) その他センター長が必要と認めた者 若干名

2 前項の委員は、センター長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長の指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席し、かつ、第3条第1項第3号の委員の1名以上の出席がなければ開くことができない。

- 2 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 3 委員会の開催及び議事は、緊急を要する場合において電子通信システムを用いて行うことができるものとする。

(審査の申請手続き等)

第7条 研究計画の審査を申請しようとする者（以下「申請者」という。）は、北海道大学社会科学実験研究センターにおける人間を対象とする研究倫理審査申請書（様式1）によりセンター長に申請するものとする。

- 2 センター長は、前項の申請があったときは、委員会に付託するものとする。



3 委員会は、センター長の付託があったときは、当該申請を審議し、その結果をセンター長に報告するものとする。

(審査の判定)

第8条 審査は、次に掲げる区分により判定を行うものとする。

- (1) 承認
- (2) 条件付き承認
- (3) 不承認
- (4) 非該当

2 委員会は、必要に応じて、申請者から研究計画に関して詳細な説明を求めることができる。

(判定結果の通知)

第9条 センター長は、第7条第3項の報告を受けたときは、速やかに申請者に審査結果を北海道大学社会科学実験研究センターにおける人間を対象とする研究倫理審査結果通知書(様式2)を交付することにより通知しなければならない。

(再審査)

第10条 申請者は、審査の判定結果に対し異議のある場合は、前条に規定する審査結果通知書を受領した日から起算して2週間以内にセンター長に再審査を請求することができる。

2 再審査の請求は、北海道大学社会科学実験研究センターにおける人間を対象とする研究倫理再審査申請書(様式3)により申請しなければならない。

3 再審査は、当初の審査を担当した委員以外に、若干名の委員を追加して審査を行うものとする。

(庶務)

第11条 委員会の庶務は、文学研究科・文学部事務部において処理する。

(雑則)

第12条 この内規の実施に関し必要な事項は、本センター運営委員会の議を経て、センター長が別に定める。

附 則

この内規は、平成20年6月24日から施行する。

# 北海道大学社会科学実験研究センター点検評価内規

平成 20 年 2 月 19 日

(趣旨)

第 1 条 この内規は、国立大学法人北海道大学評価規程（平成 16 年海大達第 68 号）に基づき、北海道大学社会科学実験研究センター（以下「センター」という。）が行う教育研究活動等の状況についての点検及び評価に関し、必要な事項を定めるものとする。

(委員会)

第 2 条 センターに、次に掲げる事項を行うため、北海道大学社会科学実験研究センター点検評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

- (1) センターの点検及び評価の基本方針並びに実施基準等の策定に関すること。
- (2) センターの点検及び評価の実施に関すること。
- (3) センターの点検及び評価に関する報告書等の作成及び公表に関すること。
- (4) センターの点検及び評価結果の学外者による検証の実施に関すること。
- (5) 法人評価及び認証評価に関すること。

(組織)

第 3 条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの専任教員
- (3) 文学研究科・文学部事務長
- (4) その他センター長が必要と認めた者 若干名

2 前項第 4 号の委員は、センター長が委嘱する。

3 前項の委員の任期は 2 年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 前項の委員は、再任されることができる。

(委員長)

第 4 条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第 5 条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開くことができない。

2 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決する。

(専門委員会)

第 6 条 委員会に、点検及び評価に係る専門的事項を処理するために、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

(評価の公表)

第 7 条 センター長は、委員会が点検及び評価を実施し、その結果を取りまとめた場合は、これを公表するものとする。

(学外者による検証)

第 8 条 センター長は、委員会が行った点検及び評価の結果について、学外者による検証を受けるように努めるものとする。

(評価結果への対応)

第9条 センター長は、委員会が行った点検及び評価、学外者による検証並びに法人評価及び認証評価の結果に基づき、改善が必要と認められる事項については、その改善に努めるものとする。

(庶務)

第10条 委員会の庶務は、文学研究科・文学部事務部において処理する。

(雑則)

第11条 この内規に定めるもののほか、センターの点検及び評価に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この内規は、平成20年2月19日から施行する。



社会科学実験研究センター